遺物出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は不明であるが、遺構の形態から中世と考えられる。

第17号地下式壇（第534図）

位置 調査2区の北部、D2a7区。

主軸方向 N－18°－E

堅坑 天井部が崩落しており、上面の形状は不明である。底面は長軸0.56m、短軸0.45mの長方形で、主室に向かってわずかに傾斜している。確認面からの深さは0.84～0.94mである。

主室 底面は、長軸0.97m、短軸0.81mの長方形で、長軸方向はN－12°－Eである。確認面からの深さは0.98mで、平坦である。

壁 堅坑及び主室は、外側で平らに設けられている。

覆土 8層からなる。

土層説明
1. 暗褐色 砦小ブロック・砶粒子多量, 砧大ブロック微
2. 暗褐色 砧小ブロック・砶粒子多量, 砧中ブロック微
3. 暗褐色 砧小ブロック・砶粒子多量
4. 黒褐色 砧小ブロック・砶粒子多量, 砧中ブロック中
5. 暗褐色 砧小ブロック・砶粒子多量, 砧大ブロック中
6. 暗褐色 砧小ブロック・砶粒子多量, 砧大ブロック中
7. 黒褐色 砧小ブロック・砶粒子中量
8. 黒褐色 砧大ブロック・砶小ブロック・砶粒子中量

遺物出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は不明であるが、遺構の形態から中世と考えられる。

第18号地下式壇（第535図）

位置 調査2区の北部、B333区。

主軸方向 N－46°－E

堅坑 上面は、長径0.89m、短径0.62m。底面は、長径0.72m、短径0.54mで、いずれも半円形状である。底面は主室に向かってわずかに傾斜している。確認面からの深さは、0.80～0.88mである。
主室　底面は、長径1.44m、短径1.20mの楕円形で、長径方向はN−35°−Wである。確認面からの深さは1.08mで、平均である。

壁　堅壁は直立する。主室はわずかにオーバーハングする。

覆土　13層からなる。堅壁から主室へ流れ込むような堆積状況を示している。第5・6層はローム大ブロックが主体となっていることから、天井部が崩落したものと考えられる。

表9　地下式壇一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>序号</th>
<th>位置</th>
<th>長径方向（短径方向）</th>
<th>坚壁主室</th>
<th>出土遺物</th>
<th>聖地関係</th>
<th>壇考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>検円形</td>
<td>頂部</td>
<td>土師筒土器</td>
<td>0000</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>丸形</td>
<td>頂部</td>
<td>土師筒土器</td>
<td>0000</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>丸形</td>
<td>頂部</td>
<td>人間骨格</td>
<td>0000</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>丸形</td>
<td>頂部</td>
<td>石製品</td>
<td>0000</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>丸形</td>
<td>不整桝円形</td>
<td>本跡</td>
<td>0000</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>丸形</td>
<td>不整桝円形</td>
<td>本跡</td>
<td>0000</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>丸形</td>
<td>本跡</td>
<td>本跡</td>
<td>0000</td>
</tr>
</tbody>
</table>
3 塩
調査1区の中央部から南部にかけて、平面形が南向きにコの字状を呈する場か、1条検出された。以下、遺構について記載する。

第1号塩（第365－358図、付図）
位置  調査1区の中央部以南、C4h5～D7a1区。
重複関係  第25・26・43号住居跡を掘り込み、第11号地下式壇に掘り込まれている。また、第10号構と重複しているが、新旧関係は不明である。
規模と形状  検出できた長さは199.0m、幅上2.55～4.25m、幅下0.75～2.10m、深さ0.78～1.10mである。
1区の南部を東西及び南北方向に走り、平面形がコの字状を呈する。塩は、底面から21～40度の角度で立ち上がる。12～38cm立ち上がった後、角度を45～50度に変えて確認面まで立ち上がる。断面形は箱根研状である。
方向  検出されたD4a6区から北西方向（N－23°－W）に延び、C4g5区で北東方向（N－49°－E）に向きを変え、再びB6c2区で南東方向（N－150°－E）へ向きを変え、D7a1区の調査区端まで直線的に延びる。
底面  鹿沼層の中・下層まで掘り込んでる。北側及び東側部分から多数のビットが検出され、凹凸である。
しかし、西側部分（D4区付近）には、ピットはほとんど存在せず、平坦である。
ビット  底面・壁面から多数のビットが検出された。そのうち底面から壁が立ち上がる付近の両側に長径30～70cm、短径24～60cmの円形ないし楕円形、深さ5～30cmほどのビットが並行しているところがあるが、隔間は必ずしも一定ではない。
覆土  6～11層からなる。土層断面図中のSPD－D'付近は縄文時代の遺構が多く、そこを掘り込んでいるために、不規則な堆積状況をしている。遺構の重複がないところの土層（SPA、SPB、SPC、SPE）は、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

<table>
<thead>
<tr>
<th>土層解説（SPD－D'）</th>
<th>3区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 隈褐色</td>
<td>ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子、炭化粒子、鹿沼パピリス粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>2 隈褐色</td>
<td>ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子、鹿沼パピリス小ブロック、鹿沼パピリス粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>3 隈褐色</td>
<td>ローム粒子、ロームブロック、ローム粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>4 隈褐色</td>
<td>ローム粒子、ロームブロック、ローム粒子、鹿沼パピリス粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>5 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>土層解説（SPE－E）</th>
<th>11区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 黒褐色</td>
<td>ローム粒子、鹿沼パピリス粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>2 黒褐色</td>
<td>ローム粒子、鹿沼パピリス粒子、鹿沼パピリス小ブロック</td>
</tr>
<tr>
<td>3 黒褐色</td>
<td>ローム粒子、鹿沼パピリス小ブロック</td>
</tr>
<tr>
<td>4 黒褐色</td>
<td>ローム粒子、鹿沼パピリス小ブロック</td>
</tr>
<tr>
<td>5 黒褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>土層解説（SPG－E）</th>
<th>23区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 隈褐色</td>
<td>ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子、鹿沼パピリス粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>2 隈褐色</td>
<td>ローム粒子、ロームブロック、ローム粒子、鹿沼パピリス粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>3 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>土層解説（SPG－G）</th>
<th>23区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>2 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>3 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>土層解説（SPG－F）</th>
<th>17区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>4 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>5 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>6 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>覆土</th>
<th>土層</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>2 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
<tr>
<td>3 隈褐色</td>
<td>ローム粒子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

回る
遺物　東西方向に走る北側堀の東側、南北方向に走る東側堀を中心に、土師質土器80点、陶器片24点等が出土している。細片が多いので、うち土師質土器4点、陶器片4点を抽出・図示した。第337図1〜4の土師質土器内耳鍋は、東側堀の覆土から出土している。6の陶器鉢片は、東側堀の覆土中層から出土している。5の陶器壷の口縁部片は、覆土下層から出土している。7の陶器片口鉢は、東側堀の南部の覆土下層から出土している。8の陶器片敷は、北側堀の覆土中層から出土している。

所見　本跡は箱築形石に掘られただけではなく、底面に沿って不規則な並びのビットが検出されていることから機能の生場を伴っていたことも考えられる。出土遺物の中で5の壷片と6の鉢片は、断面が滑らかな形状、石陰を軽用されたと思われる。5の壷片は、常滑産で、口縁部の様子から14世紀前半のもの、一方、内耳鍋片は胎土に金雲母を含むことから在地産で、15世紀代のものと思われることなどから、14世紀代に掘られ、15世紀代に廃絶されたものと考えられる。また覆土中から硬化面（道路状遺構）が検出されたことから、通路としても利用されたと思われる。
### 第1号壇出土遺物実測図

### 第1号壇出土遺物観察表

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目番号</th>
<th>器種</th>
<th>計測値</th>
<th>器形の特徴</th>
<th>手法の特徴</th>
<th>胎土・色調・焼成</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>内耳銅土師器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>体部から口縁部にかけての破片。</td>
<td>口縁部及び体部内部の外縁模様。</td>
<td>鍍・長石・長石素物</td>
<td>体部外面反熟着</td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>内耳銅土師器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>体部から口縁部にかけての破片。</td>
<td>口縁部及び体部内部の外縁模様。</td>
<td>鍍・長石素物・雲母・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>内耳銅土師器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>体部上部から口縁部にかけての破片。</td>
<td>口縁部及び体部内部の外縁模様。</td>
<td>鍍・長石素物・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>内耳銅土師器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>口縁部。口縁部は外縁する。</td>
<td>口縁部及び体部内部の外縁模様。</td>
<td>鍍・長石・長石素物・雲母・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>銅器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>体部上部から口縁部にかけての破片。</td>
<td>鍍・長石・長石素物・雲母・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>銅器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>高台部から体部にかけての破片。</td>
<td>鍍・長石・長石素物・雲母・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>鍬器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>高台部から体部にかけての破片。</td>
<td>鍍・長石・長石素物・雲母・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>鍬器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>高台部から体部にかけての破片。</td>
<td>鍍・長石・長石素物・雲母・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>鍬器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>高台部から体部にかけての破片。</td>
<td>鍍・長石・長石素物・雲母・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第1号壇</td>
<td>鍬器</td>
<td>□ □□□</td>
<td>高台部から体部にかけての破片。</td>
<td>鍍・長石・長石素物・雲母・赤色粒子</td>
<td>体部外面反熟着</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

---

目次 | 607 | 戻る
4 井戸跡

今回の調査で井戸跡が13基検出され、うち7基を遺構の形態や遺物から中世の井戸跡とした。以下遺構及び遺物について記載する。

第1号井戸跡（第539図）
位置 調査1区の北部、A4g0区。
規模と平面形 長径1.70m、短径1.48mの橢円形である。断面の形状は、下位が狭くなる逆台形状に掘り込まれているが、湧水のために確認面から2.21mまでしか掘り下げられなかった。
長径方向 N−32°−E
覆土 崩落のために図化できたのは、確認面から1.45mの深さまでである。4層からなり、ブロック状に堆積しているので人為堆積である。

土層解說
1 暗褐色 ローム粒子を少少量、ローム小ブロック数
2 黒色 ローム小ブロック、ローム粒子数
3 黒褐色 ローム小ブロック、ローム粒子数
4 暗褐色 ローム大ブロック、ローム中ブロック数

遺物 土師質土器片18点が出土しているが、細片のため抽出・図示できなかった。
所見 本跡は、谷部の先端部にある。谷部は、黑色土除去後、雨天になると水が溜まり、プールの状態を呈し、なかなか抜けないことから水は豊かであったと思われる。抽出・図示はできなかったが、出土した土師質土器（内耳鍋）片は、第3号井戸跡と同様なものであることから、15世紀後半から16世紀前半と思われる。

第2号井戸跡（第540図）
位置 調査1区の北西部、B4d1区。
規模と平面形 長径1.64m、短径1.41mの橢円形である。断面の形状は、確認面から0.95mの深さまで掘り込む状に、そこから下は径約0.85mの円筒形に、それぞれ掘り込まれている。湧水及び崩落の危険のために確認面から1.77mまでしか掘り下げられなかった。
長径方向 N−86°−E
覆土 12層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積と思われる。

土層解說
1 暗褐色 ローム粒子、ワサ化物、炭化粒子数
2 黒褐色 ローム粒子を少少量、ローム小ブロック数
3 黒褐色 ローム小ブロック、炭化物數
4 暗褐色 ローム粒子数、ローム小ブロック、炭化粒子数

戻る
遺物 金属製品1点（釘）が出土している。第542図1の釘は、覆土から出土している。

所見 釘が出土しているが、本跡に伴うものはどうか不明である。その他に遺物は出土していないが、遺構の形態などから近在する第1号井戸跡と同じ頃と思われる。

第2号井戸跡出土遺物実測図

第2号井戸跡出土遺物観察表

<table>
<thead>
<tr>
<th>図版番号</th>
<th>項 案</th>
<th>計</th>
<th>材 質</th>
<th>特 徴</th>
<th>備 考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第3号</td>
<td>釘</td>
<td>長さ 2cm</td>
<td>幅</td>
<td>厚さ 2cm</td>
<td>重量 5g</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>鉄</td>
<td>先端がJ字状に屈曲。</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

第3号井戸跡（第541図）

位置 調査1区の北西部、B3e6i区。

規模と平面形 長径1.50m、短径1.30mの横円形である。断面形は、確認面から深さ約0.55mまで漏斗状に、そこから底面の粘土層まで径約0.94mの円筒形状に、それぞれ掘り込まれている。東壁の中層から下層にかけてに壇基状の掘り込みがある。

長径方向 N－62°－W

覆土 11層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム小ブロックや、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子含量が多い
2 黒褐色 ローム粒子、ローム小ブロック、炭化粒子含量が多い
3 褐色 ローム中ブロック、ローム粒子中、炭化粒子含量が多い
4 黒褐色 ローム中ブロック、ローム粒子中、炭化粒子含量が多い
5 褐色 ローム中ブロック、ローム粒子中、炭化粒子含量が多い
6 黒褐色 ローム中ブロック、ローム粒子中、炭化粒子含量が多い

遺物 土師質土器片3点、陶器片5点、水中より長さ約50cm、幅約30cmの長方形、厚さ3～4cmのわてで編まれたものが出土している。うち土師質土器内耳鍋片1点を抽出・図示した。第541図1の土師質土器内耳鍋は、覆土中から出土している。
所見　わら製のものは、井戸の屋根などに用いられていたものと考えられる。時期は、出土土器から15世紀後半から16世紀前半と思われる。

第3号井戸跡・出土遺物実測図

第3号井戸跡出土遺物観察表

<table>
<thead>
<tr>
<th>館番号</th>
<th>器種</th>
<th>器形</th>
<th>計測値（cm）</th>
<th>器形の特徴</th>
<th>手法の特徴</th>
<th>色調・焼成</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第3号井戸跡</td>
<td>内耳筒</td>
<td>口縁部</td>
<td>0.10</td>
<td>口縁部内に外縁にナデ。耳貼り付け後、ナデ。</td>
<td>色調・焼成</td>
<td>齒・長石・石英・雲母</td>
<td>ふい液色、普通</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第4号井戸跡（第542図）

位置　調査1区の北部、A52区。

規模と平面形　長径2.03m、短径1.94mの円形である。断面形の形状は、確認面から約1.30mの深さまで淵斗状に掘り込まれ、この付近に壷状の掘り込みを持つ。それより下位は、逆台形状に開いて掘り込まれているが、渇水のために確認面から2.22mまでしか掘り下げられなかった。

覆土　11層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積である。

土層解説

<table>
<thead>
<tr>
<th>層号</th>
<th>風化色</th>
<th>ブロック中量</th>
<th>ブロック粒子少</th>
<th>炭化粒子少</th>
<th>焼入粒少</th>
<th>焼入粒子少</th>
<th>登録記号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>黒褐色</td>
<td>ブロック中量</td>
<td>ブロック粒子少</td>
<td>炭化粒子少</td>
<td>焼入粒少</td>
<td>焼入粒子少</td>
<td>00000000</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>黒褐色</td>
<td>ブロック中量</td>
<td>ブロック粒子少</td>
<td>炭化粒子少</td>
<td>焼入粒少</td>
<td>焼入粒子少</td>
<td>00000000</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>黒褐色</td>
<td>ブロック中量</td>
<td>ブロック粒子少</td>
<td>炭化粒子少</td>
<td>焼入粒少</td>
<td>焼入粒子少</td>
<td>00000000</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>明褐色</td>
<td>ブロック中量</td>
<td>ブロック粒子少</td>
<td>炭化粒子少</td>
<td>焼入粒少</td>
<td>焼入粒子少</td>
<td>00000000</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>明褐色</td>
<td>ブロック中量</td>
<td>ブロック粒子少</td>
<td>炭化粒子少</td>
<td>焼入粒少</td>
<td>焼入粒子少</td>
<td>00000000</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>明褐色</td>
<td>ブロック中量</td>
<td>ブロック粒子少</td>
<td>炭化粒子少</td>
<td>焼入粒少</td>
<td>焼入粒子少</td>
<td>00000000</td>
</tr>
</tbody>
</table>

遺物　土師質土器片2点。陶器片3点と出土遺物は少なく、細片である。うち陶器2点を抽出・図示した。第542図1の陶器片口鉢（常滑産）2の陶器深鉢（瀬戸産）は、出土位置は不明であるが、覆土下層から出土している。

所見　時期は、出土土器から15世紀後半と考えられる。
第4号井戸跡出土遺物実測図

第4号井戸跡出土遺物観察表

<table>
<thead>
<tr>
<th>銘版番号</th>
<th>器種</th>
<th>計測値</th>
<th>器形の特徴</th>
<th>手法の特徴</th>
<th>器土・色調・焼成</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第4号井戸跡</td>
<td>片口鉢</td>
<td>0.01</td>
<td>口縁部片。口縁部は外側に立ち上がる。</td>
<td>口縁部内・外面のクロロナデ。</td>
<td>燃・長石・石英明</td>
<td>計:オリーブ黄</td>
</tr>
<tr>
<td>深口鉢</td>
<td>0.01</td>
<td>体部片。体部は外側に立ち上がられる。</td>
<td>体部内面のクロロナデ。外壁回転ヘラ削り後、内・外壁上半部焼成。</td>
<td>長石</td>
<td>灰黄色</td>
<td>良好</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第5号井戸跡（第543図）

位置 調査1区の西部、C4c2区。

規模と平面形 径1.8mの円形である。断面形の形状は、確認面から約0.80mの深さまで渦斗状に掘り込まれている。そこから下位は、径約1.00mの円筒形状に掘り込まれているが、渦斗のために確認面から約1.37mまでしか掘り下げられなかった。確認面から0.74〜1.72m間の壁に、壊損状の掘り込みを持つ。

覆土 13層からなる。黒色土の中心のあまり認められないので、黑灰色のある土層のため崩れやすかったが、湿り気のある覆土のため馬骨の残りが良かった。馬骨が入っていたことなどから人間の墳墓と思われる。

土層解説

1. 黒褐色：ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2. 黒褐色：ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
3. 黒褐色：ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
4. 黒褐色：ローム粒子少量・ローム中ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
5. 黒褐色：ローム小ブロック・ローム粒子微量
6. 黒褐色：ローム小ブロック・ローム粒子微量・ローム中ブロック・炭化粒子微量
7. 黒褐色：ローム粒子少量・炭化粒子微量
8. 黒褐色：ローム粒子少量・ローム小ブロック・炭化物微量
9. 黒褐色：ローム粒子・鹿沼バシズ粒子微量
10. 黒褐色：ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・鹿沼バシズ粒子微量
11. 黒褐色：ローム粒子・鹿沼バシズ粒子・白色スコリア微量

— 611 —
遺物 陶器片1点と馬骨が出土している。陶器は、細片で図示できなかった。馬骨（頭・足等）は、折り重なるように確認面から0.24〜0.72m（第4〜8層）の間で出土している。
所見 馬骨を挟む土層がブロック状に堆積していることから、馬骨は、井戸の廃棄時に意図的に埋められたと思われる。時期は、壁に盤状の掘込みを持つ第4号井戸跡等と同じ頃と思われる。

第5号井戸跡実測図

第6号井戸跡（第544図）
位置 調査1区の南東部、C5d0区。
重複関係 第1号粘土貼土壇を掘り込んでいる。
規模と平面形 径1.45mのほぼ円形で、北側付近の壁は、確認面から深さ0.95mまで急な傾斜を持つが、他はほぼ直に垂下する。それから下位は、径0.78〜0.94mの円錐状に、3.55mの底面まで掘り込まれている。底面は、平坦である。
覆土 12層からなる。確認面から深さ0.95mまで摂乱が入り、特にそれが著しい0.45m前後までは、土層を割愛した。1層から11層までは、白色粘土ブロックを中心とした覆土である。壁は、鹿沼層下の褐色系のローム土であることから、人為的に埋め戻されたものと思われる。
8 オリーブ色 白色粘土大ブロック・白色粘土小ブロック・白色粘土粒子多量、ローム粒子・白色粘土小ブロック・白色粘土粒子・砂粒子少量化・炭化物・炭化粘土粒子微量
9 灰オリーブ色 白色粘土大ブロック・白色粘土小ブロック・白色粘土小ブロック・白色粘土粒子多量、砂粒子少量化・炭化物・炭化粘土粒子微量
10 オリーブ黄色 白色粘土大ブロック・白色粘土小ブロック・白色粘土小ブロック・白色粘土粒子多量、ローム粒子・炭化物粒子微量

遺物 陶器片2点が出土しているが、細部のために抽出・図示できなかった。

所見 小支谷を望むゆるやかな斜面上に位置する。小陶器片や遺構の形態などから、15世紀後半～16世紀前半と思われる。

第8号井戸跡（第545図）
位置 調査1区の南東部、C5g9区。
重複関係 北西部を第520号土坑に掘り込まれている。
規模と平面形 北西部上部を第520号土坑に掘り込まれているため、長径1.45m、短径1.23mの楕円形と推定される。確認面から深さ1.62mにある底面は、長径1.33m、短径1.08mの楕円形である。断面の形状は、確認面から約1.30mの深さまで漏水状に掘り込まれ、この付近に壊壊状の掘り込みを持つ。それより下位は、円筒形を呈するが、漏水のために確認面から2.22mまでしか掘り下げられなかった。
長径方向 N～66°～E
覆土 8層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積と思われる。

土壌解説
1 黒褐色 ローム粒子少量化、ローム小ブロック・炭化物・炭化粘土粒子・粘土小ブロック微量
2 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、鹿沼バミス粒子少量化、ローム中ブロック微量
3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック粒子少量化
4 黒褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子中量、鹿沼バミス中ブロック粒子少量化
5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量化、鹿沼バミス粒子微量

遺物 出土していない。
所見 出土遺物は無いか、遺構の形態や第1号堀の内側に位置することなどから他の多くの井戸跡と同じ頃と
思われる。

第8図 第8号井戸跡測定図

表 中世井戸跡一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>場所</th>
<th>位置</th>
<th>長短方向</th>
<th>平面形</th>
<th>長径</th>
<th>深さ</th>
<th>覆土</th>
<th>出土遺物</th>
<th>重複関係</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>棟円形</td>
<td>37.2</td>
<td>2.0</td>
<td>人為</td>
<td>金属製品</td>
<td>旧新</td>
<td>元の形</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>棟円形</td>
<td>37.2</td>
<td>2.0</td>
<td>人為</td>
<td>土師器土器</td>
<td>旧新</td>
<td>元の形</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>棟円形</td>
<td>37.2</td>
<td>2.0</td>
<td>人為</td>
<td>土師器土器</td>
<td>旧新</td>
<td>元の形</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>円形</td>
<td>37.2</td>
<td>2.0</td>
<td>人為</td>
<td>磁器,陶器</td>
<td>旧新</td>
<td>元の形</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>円形</td>
<td>37.2</td>
<td>2.0</td>
<td>人為</td>
<td>磁器,陶器</td>
<td>旧新</td>
<td>元の形</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>0</td>
<td>37.2</td>
<td>2.0</td>
<td>人為</td>
<td>本形</td>
<td>旧新</td>
<td>元の形</td>
</tr>
</tbody>
</table>

5 粘土跡土坑
1区南部のゆるやかな斜面の上に粘土を貼った土坑が1基検出された。以下、構造について記載する。

第1号粘土跡土坑（第546図）

位置 調査1区の南東部、C5d0区。

重複関係 大部分を第6号井戸に掘り込まれている。

規模と平面形 第6号井戸に掘り込まれているため正確な規模と平面形は不明であるが、長軸1.43m、短軸1.19mの隅丸正方形と推定される。

長軸方向 N-17°Wと推定される。

壁 残存する壁高は25cmほどで、外傾する。4〜7cmの厚さに粘土が貼ってある。

底 北東コーナー付近が残存し、平坦である。4cm前後の厚さに、粘土が貼ってある。

覆土 耕作による覆土が多数入っていることや確認面からの深さがあまりないために、明細できなかった。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物がないため明確な時期は不明であるが、15世紀前半から16世紀前半と思われる第6号井戸に掘り込まれていることから、それ以前と考えられる。
6 土坑墓
調査1区の北東部から、人骨と古銭を伴う土坑墓1基が検出されているので、その状況及び遺物について記載する。

第2号土坑墓（第547図）
位置 調査1区の北東部、B364区。
規模と平面形 北壁東側がやや突出しているが、長軸2.01m、短軸1.28mの隅丸長方形で、深さ40〜50cmである。
長径方向 N〜47°〜W
底面 踏み固められていないローム土で、北側がやや高くなっている。
覆土 24層からなる。不規則な堆積状況をしていることから、人為堆積である。

土層解説

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>色</th>
<th>土層名及物性</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>褐</td>
<td>ローム小ブロック・Roman土粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>黄</td>
<td>ローム小ブロック・Roman土粒子多量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>褐</td>
<td>ローム粒子中量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>黄</td>
<td>ローム粒子中量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>にふい</td>
<td>ローム小ブロック・Roman土粒子多量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>褐</td>
<td>ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子多量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>にふい</td>
<td>ローム小ブロック・Roman土粒子多量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>にふい</td>
<td>ローム粒子中量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>褐</td>
<td>ローム粒子中量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>褐</td>
<td>ローム粒子中量、炭化粒子細粒</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>黄</td>
<td>ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子多量</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>褐</td>
<td>ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子多量</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>褐</td>
<td>ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子多量</td>
</tr>
</tbody>
</table>

遺物 人骨片5点、古銭3点が出土している。骨は最大で37cmほどの長さをもつが、粒状及び片状の部分もあり、観察状態で出土している。また、古銭が3点まとまって、北コーナーよりの頭骨と思われる近くの覆土下層から出土している。

所見 本跡は、人骨と古銭が出土していることや遺構の形態から土坑墓と考えられる。出土している古銭のうち2点は、「元寶通寶（行書体）」と判読できる。「元寶通寶」は、11世紀後半（1079〜1086年）に鋳造された北宋銭であることから中世の土坑墓と思われる。当遺跡の中世の遺構である掘り下げ式造の時期は、15世紀〜16世紀前半と考えられることから、本跡もこの頃のものと思われる。

第 図 第2号土坑墓・出土遺物実測図

— 615 —
第２号土塚墓出土遺物観察表

<table>
<thead>
<tr>
<th>園版番号</th>
<th>器種</th>
<th>計</th>
<th>測</th>
<th>側</th>
<th>材質</th>
<th>特</th>
<th>徴</th>
<th>備</th>
<th>考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 古銅</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>鍮</td>
<td>「元豊通貨」明治3年 北宋錠</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2 古銅</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>11</td>
<td>鍮</td>
<td>「元豊通貨」明治3年 北宋錠</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

7 道路状遭構
コの字状を呈する第1号塚の内側に道路状遭構1条が検出されている。検出された道路状遭構について記載する。

第1号道路状遭構（第548図・付図）
位置 調査1区の中央部。G46f～C5a2区。
重複関係 第1号塚の一部が埋まった後、踏み固められている。
規模と平面形 底面から26～40cmほど埋まった覆土上に、幅が0.10～1.14m、長さが34.56mの光沢のある硬化面が検出できた。深さは、現の確認面から60～70cmほどである。硬化面の北部は厚さ4～8cm（第1層）であるが、南部は踏み固めが弱く、硬化面の幅が狭くなったり途切れたする。また、硬化面と塚の覆土層が不明瞭である。
覆土 北東部の硬化面下の土層は、7層からなる。塚の土層の多くは、レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説
| 1 |黒 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量 | 2 |黒 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 |暗 褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 |暗褐褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 |紫 色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミスメシブロック・鹿沼パミス粒子微量 |

遺物 出土していない。

所見 本跡は、北東コーナー方向に続いていたと思われる。第1号塚が底面から26～40cmほど埋まった頃に、通路として利用されたため硬化したものと思われる。時期は、出土遺物がなく不明であるが、塚の埋まりが少ないことから、まだ塚が機能していた頃（15世紀代）のもとと考えられる。
第7節 時期不明の遺構と遺物

Ⅰ 堅穴住居跡

調査1区及び4・5区から、遺構の重複がなく、遺構にともなう遺物も出土していなかったため、時期が明らかでない堅穴住居跡が6軒検査された。以下、これらの遺構について記述する。

第4号住居跡（第549図）

位置 調査1区の西部、B3h0区

規模と平面形 長軸4.34m、短軸3.42mの長方形である。

主軸方向 N-96°E

壁 壁面は10〜12cmで、ほぼ直立する。

床 ほぼ平面である。耕作機械による擾乱がひどく、竈左側部の北側にのみ踏み固められた部分が遺存している。

ピット 1か所。P1は、南壁寄りの竈近くにあり、長径60cm、短径48cmの楕円形、深さ8cmである。性格は不明である。

第103図 第4号住居跡実測図
竪 東壁の南コーナー寄りに、粘土と少量の砂粒を混ぜて構築されている。壁面への掘り込みは、竪乱により確認できなかった。規模は、確認できた北壁から縁口部まで98cm、最大幅118cmで。火床面は床面と同じレベルの平坦面を使用している。竪乱を免れた袖部の内壁及び火床面は火熱を受けてわずかに赤変しているが、あまり硬化していない。

竪土層解説
1. 約白色 粘土粒子の中量、栄土粒子の少量、灰化粒子の微量
2. 褐色 栄土粒子、栄土粒子の微量
3. にぶい灰色 栄土粒子の中量、栄土粒子の少量、栄土粒子の微量
4. 黄褐色 粘土粒子の中量、栄土粒子の中量、栄土粒子の微量

覆土 3层からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

土層解説
1. 約白色 栄土粒子、栄土粒子、栄土粒子、栄土粒子、栄土粒子
2. 褐色 栄土粒子、栄土粒子、栄土粒子、栄土粒子、栄土粒子

遺物 出土量は少なく、竪中及び竪の周りの床面から塗師器の細片が6片出土しているだけである。図示できるものはない。

所見 出土土器も少なく、細片であることから、本跡の時期は不明である。

第16号住居跡（第550図）
位置 調査1区西部、B46区。
確認状況 壁や床は残存していないが、竪とビットが確認されたことから住居跡と判断した。
規模と平面形状 不明である。
主軸方向 不明である。
壁 確認されなかった。
床 確認されなかった。
ビット 4か所（P1～P4）。P1は長径24cm、短径22cmの円形、P2～P4は長径25～26cm、短径20～22cmの楕円形で、確認面からの深さは14～29cmである。
第22号住居跡（第551図）
位置 検査1区南西部、C4d6区。

確認状況 壁や床は残存していないが、窯とヒットが確認されたことから住居跡と判断した。
規模と平面形 不明である。
主軸方向 不明である。
壁 確認されなかった。
床 確認されなかった。

ヒット 4か所（P1～P4）。P1～P3は長径30～32cm、短径31～34cmの円形、P4は長径45cm、短径34cmの楕円形で、確認面からの深さは29～44cmである。

第29号住居跡（第552図）
位置 検査1区の東部、C6g7区

規模と平面形 床面がほぼ露出した状態で検出され、壁などが検出できなかったが、竈の火床部と出入口ヒット等から、長軸2.78m、短軸2.70mの方形と推定される。

主軸方向 [N-2°-E]
床 ほぼ平坦である。

ヒット 3か所（P1～P3）。P1は径26cmほどの円形、深さ31cmで、竈の火床部の南方向に位置することなどから出入口設施に伴うヒットと思われる。P2は径24cmほどの円形、深さ36cmである。P3は長径38cm、短径32cmの楕円形、深さ31cmである。両者の性格は不明である。

竈 北側から火床部と思われる赤変下楕円形の皿状のくぼみと、その周りに軸部の痕跡と思われる薄い粘土の
広がりが検出された。

<table>
<thead>
<tr>
<th>地下室床土層解説</th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1.</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2.</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3.</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

遺物 出土していない。

所見 床面しか残存していなかったため、覆土の堆積状況は不明である。また、出土遺物がないことから時期も不明である。

第0号図 第0号住居跡実測図

第90号住居跡（第553図）

位置 調査4区の西部、G4h1区。

重複関係 第13号溝に掘り込まれており、第794号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 段差のある斜面部に位置しているため、南部及び東部は確認できなかった。床面と思われる硬化面が確認できたため、住居跡の可能性を考えた。硬化面の範囲は南北1.32m、東西1.20mである。

主軸方向 硬化面だけでの検出のため、不明である。

壁 擬乱及び溝や土坑を重複しているために確認できなかった。

床 検出された部分は、ほぼ平坦で、踏み固められている。

覆土 本跡のものと確認できたのは、1層だけである。堆積状況は不明である。

土層解説

1. 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・鷹沼断面少な量

遺物 出土していない。

所見 出土遺物がなく、また住居跡の形状が不明なため。時期は不明である。
第125号住居跡（第229図）
位置 調査5区の中央部、G6e4区。
重複関係 第124号住居及び第76・87号ビットに掘り込まれ、第883号土坑を掘り込んでいる。
規模と平面形 第124号住居跡等に掘り込まれているため、残存状況は悪い。残存する壁の長さは、東西3.57m、南北1.75mである。平面形は不明である。
主軸方向 不明である。
壁 残存する壁高は35〜55cmで、外傾して立ち上がる。
床 ほぼ平坦である。検出された範囲は、踏み固められている。
遺物 弥生土器や土師器、須恵器の細片が少量出土しているが、抽出・図示できるものはなかった。
所見 弥生時代や奈良・平安時代の土器が混じって出土していることや遺構の形態が不明であることなどから、時期は不明である。

表 Ⅱ 時期不明住居跡一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>住居跡番号</th>
<th>位置</th>
<th>主軸方向</th>
<th>平面形</th>
<th>規模（m）</th>
<th>壁高（cm）</th>
<th>床面</th>
<th>壁溝</th>
<th>内部構造</th>
<th>厚い</th>
<th>出土遺物</th>
<th>重複関係</th>
<th>発掘番号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>00</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>長方形</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>平坦</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>自然</td>
</tr>
<tr>
<td>00</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>00</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>00</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>方形</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>平坦</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>00</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>不明</td>
<td>長方形</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>平坦</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>00</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>不明</td>
</tr>
</tbody>
</table>

2 掘立柱建物跡
調査2区の北部に、遺物が出土しておらず、時期不明の掘立柱建物跡3棟が検出された。以下、その遺構について解説する。
第51号掘立柱建物跡（第554図）

位置 調査2区の北部、C200区。

重複関係 第146号住居跡と重複しているが、本跡との新旧関係は不明である。

規模 東側柱列の柱穴1ヶ所及び北側柱列は確認されなかったが、検出された柱穴の覆土及び配列から、掘立柱建物跡とした。東西棟で、柱行3間、梁行3間の側柱建物跡と考えられる。栄行は8.44m、梁行は5.30mである。栄行は、P4・P5間が3.50mとほかより広く、それ以外の柱間寸法は、2.45mほどである。また、栄行は、P5・P6間が1.75mとP1・P7間の2.13mより狭くなっている。柱穴は、平面形が長径22～35cm、短径10～24cmの円形及び楕円形で、深さは12～52cmである。

栄行方向 N－86°－W

覆土 第1・4・8層は柱抜き取り後の覆土である。第5・7層は、土層断面図上、柱抜き取り痕をはさんで、ほぼ水平な堆積状況を示す埋土である。その他は不規則な堆積状況を示し中程度に提まった柱抜き取り後の覆土である。

土層解説
1 黒 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土バニス粒子少量
3 黒 褐 色 ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
4 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量
5 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
6 暗褐色 ローム粒子少量
7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
8 黒 色 ローム粒子微量
9 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
10 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒・炭化粒子微量

第□□図 第□□号掘立柱建物跡実測図
遺物 出土していない。
所見 遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第52号掘立柱建物跡（第555図）
位置 調査2区の北部、C3d2区。
重複関係 第55号掘立柱建物跡と重複しているが、本跡との新旧関係は不明である。
規模 北側柱列は確認されなかったが、検出された柱穴の覆土及び配列から、掘立柱建物跡とした。南側柱列は2軒であり、東側及び西側柱列は1軒以上で、側柱建物跡と考えられる。南側柱列が3.15m、西側柱列が1.90m、東側柱列が1.53mである。柱間寸法は南側柱列が1.70・1.81mである。柱穴は、平面形が長径35〜42cm、短径30〜40cmの橢円形及び円形、深さは36〜50cmである。

d）行方向 N－19°－W
覆土 いずれも不規則な堆積状況を示し、中程度に縦まった柱抜き取り後の覆土である。

土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
4 暗 褐色 ローム粒子中量
5 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
6 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
7 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
8 褐 色 ローム粒子多量
9 褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量
10 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
11 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

遺物 出土していない。
所見 遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第55号掘立柱建物跡実測図

第55号掘立柱建物跡（第556図）
位置 調査2区の北部、C3c3区。
重複関係 第52・53号掘立柱建物跡と重複しているが、本跡との新旧関係は不明である。
規模 柱行2軒、梁行1軒で東西棟の倒柱建物跡である。柱行5.14m、梁行4.04mである。柱間寸法は柱行が2.40〜2.75m、梁行が4.03〜4.07mである。柱穴は、平面形が長径59〜76cm、短径54〜64cmの橢円形及び円形で、深さが48〜68cmである。
栄行方向 N-57°-W
遺物 出土していない。
所見 遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第 図 第 号掘立柱建物跡実測図

表 時期不明掘立柱建物跡一覧表
3 屋外炉

今回の調査で、壁や床、ピットが確認できず、炉のみを検出した遺構11基を屋外炉とした。そのなかで、時期不明の屋外炉8基について記載する。

第9号屋外炉（第557図）
位置 調査2区の北部、D2a7区。
規模と平面形 長径60cm、短径45cmの橢円形で、確認面からの深さは7cmほどである。
炉壁 底面から緩やかな傾斜をもって立ち上がる。火熱を受けて赤変し、赤変化が認められた。
炉床 皿状である。ロームが凹凸状に硬化しているが、赤変は認められなかった。
覆土 2層からなる。

土層解説
1. 黒赤褐色 煉土粒子少量、炭化粒子微量
2. 霊赤褐色 煉土粒子少量、ローム粒子・焼土ポルトーグ・炭化粒粒子

遺物 覆土中から縄文土器の細片1点が出土している。
所見 縄文時代の住居の炉跡の可能性も考えられるが、壁、床及びピットが確認できなかったため屋外炉とした。出土土器が細片で、かつ、覆土からの出土であるため、時期は不明である。

第11号屋外炉（第558図）
位置 調査2区の北部、C3f4区。
規模と平面形 径80cmの円形を呈し、確認面からの深さは9cmほどである。
炉壁 底面から緩やかな傾斜をもって立ち上がる。南西側が火熱を受けて赤変化している。
炉床 皿状である。火熱を受けて赤変化している。
覆土 3層からなる。全体に焼土粒子が含まれ、中程度に締まっている。

土層解説
1. 紫 赤褐色 煉土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
2. 青赤褐色 煉土粒子少量、炭化粒子微量
3. にぶい赤褐色 煉土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒粒子

遺物 覆土中から縄文土器の細片19点が出土している。
所見 縄文時代の住居の炉跡の可能性も考えられるが、壁、床及びピットが確認できなかったため屋外炉とした。出土土器が細片で、かつ、覆土からの出土であるため、時期は不明である。

第12号屋外炉（第559図）
位置 調査2区の北部、C3e5区。
規模と平面形 調査の過程で南側を掘り込んでしまったため全容はつかみがたいが、長径102cm、短径80cmの橢円形を呈する地床炉と推定される。確認面からの深さは20～30cmほどである。
主軸方向 N - 52° - W

炉床 火熱を受けて凹凸状に赤変硬化している。

覆土 単一層である。

土層説明
1. 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

遺物 覆土中から縄文土器の細片20点が出土している。

所見 縄文時代の住居の炉跡の可能性も考えられるが、壁、床及びビットが確認できなかったため屋外炉とした。出土土器が細片で、かつ、覆土中からの出土であるため、時期は不明である。

第13号屋外炉（第560図）

位置 調査2区の北部、C335区。

規模と平面形 長径92cm、短径64cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは18cmほどの石開口と推定される。炉石は、西側で2点のみ検出され、ともに火熱を受けた痕跡が認められた。

主軸方向 N - 58° - E

炉床 凹凸状に赤変硬化している。

覆土 3層からなる。

土層説明
1. 黒 褐色 焼土小ブロック・ローム粒子微量
2. 黒 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3. 横暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 覆土中から縄文土器の細片10点、炉石2点が出土している。

所見 特に石開口であるということから、縄文時代の住居跡の可能性も考えられるが、壁、床及びビットが確認できなかったため屋外炉とした。出土土器が細片で、かつ、覆土中からの出土であるため、時期は不明である。

第14号屋外炉（第561図）

位置 調査2区の中央部、E3d4区。

規模と平面形 確認面が炉床であり、全容は不明であるが、残存する焼土範囲から、長径59cm、短径51cmの楕円形と推定される。
主軸方向  N－58°－W

炉床  搬乱により残存状況はよくないが、火熱を受け凹凸状に赤変硬化している部分が一部認められた。

遺物  出土していない。

所見  住居の炉跡の可能性も考えられるが、壁、床及びピットが確認できなかったため屋外炉とした。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第15号屋外炉（第562図）
位置  調査2区の中央部、E3c5区。
重複関係  第25号溝に掘り込まれている。
規模と平面形  確認面が炉床であり、また、第25号溝に掘り込まれているため、全容はつかめがたいが、残存する焼土範囲から、長径111cm、短径91cmの椭円形を推定される。
主軸方向  N－18°－E
炉床  わずかに赤変硬化している。

所見  住居の炉跡の可能性も考えられるが、壁、床及びピットが確認できなかったため屋外炉とした。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第16号屋外炉（第563図）
位置  調査2区の北部、C3e6区。
規模と平面形  長径88cm、短径58cmの椭円形で、確認面からの深さは23cmほどの地床炉ある。
主軸方向  N－12°－E

炉壁  西壁が緩やかに、東壁が外傾して立ち上がる。火熱を受け赤変硬化している。

火熱を受け赤変硬化している。

覆土  2層からなる。

土層説明
| 1 | 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 灰白褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、ローム粒子微量 |

遺物  出土していない。

所見  住居の炉跡の可能性も考えられるが、壁、床及びピットが確認できなかったため屋外炉とした。遺物が出土しておらず、時期は不明である。
第18号屋外炉（第564図）
位置 調査2区の中央部、D3h9区。
確認状況 確認面において、橢円形の焼土の広がりと白色粘土ブロックが認められた。
規模と平面形 長径75cm、短径53cmの橢円形で、確認面からの深さは8cmほどである。
主軸方向 N - 6° - E

炉壁 底面から緩やかな傾斜を持って立ち上がる。火熱を受け赤変している。南壁付近からもろくなかった花崗岩及び白色粘土塊が確認されたが、傍乱が激しいため本跡に伴うかどうかは不明である。
炉床 皿状である。火熱を受け凹凸状に硬化している。
覆土 2層からなる。
土壌分析
1. 暗赤褐色 焼土粒子多量
2. 黒褐色 ローム粒子、焼土粒子、炭化物少、焼土小ブロック微量

退物 覆土中から繊文土器の細片6点、花崗岩1点が出土している。
所見 繊文時代の住居の炉跡の可能性を考慮するが、壁、床及びピットが確認できなかったため屋外炉とした。出土土器が細片で、かつ、覆土中の出土であるため、時期は不明である。

表 □ 時期不明屋外炉一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>選択番号</th>
<th>位置</th>
<th>表示方向</th>
<th>平面形</th>
<th>長径</th>
<th>深さ</th>
<th>出土退物</th>
<th>重複関係</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>橋円形</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>繊文土器片</td>
<td>旧</td>
<td>窓外炉2</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>橋円形</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>繊文土器片</td>
<td>旧</td>
<td>窓外炉4</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>橋円形</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>繊文土器片</td>
<td>旧</td>
<td>窓外炉5</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>橋円形</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>繊文土器片，炉石</td>
<td>新</td>
<td>窓外炉6</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>橋円形</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>繊文土器片</td>
<td>旧</td>
<td>窓外炉7</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>橋円形</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>繊文土器片，花崗岩</td>
<td>旧</td>
<td>窓外炉8</td>
</tr>
<tr>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>橋円形</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>繊文土器片</td>
<td>旧</td>
<td>窓外炉9</td>
</tr>
</tbody>
</table>

4 火葬土坑
2区及び1・5区の斜面部に、焼けた骨片及び炭化物を伴う平面形が長方形や眼鏡状の遺構が5基検出された。それらを火葬土坑とし、以下遺構と遺物について記載する。

— 628 —
第1号火葬土坑（第565号）

位置 調査1区の南東部、C569区。
規模と平面形 全長1.60mで、平面形は円錐状である。燃焼部は長径0.70m、短径0.65mの円形、焚口部は、長径1.06m、短径0.82mの楕円形である。焚口部と燃焼部の間に、長さ20cm、幅18cm、下幅10cm、深さ15〜23cmで、燃焼部方向に傾斜する溝が入る。
長軸方向 N - 21° - W
壁 燃焼部の壁高は10cm、焚口部の壁高は20cmほどで、ともに外傾して立ち上がる。
底 小さな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。
ピット 1か所。P1は、長径25cm、短径20cmの楕円形、深さ25cmで、燃焼部の西側に位置する。対になると思われるが、掘乱が多いために東側では確認できなかった。
覆土 4層からなる。含有物が類似していることやブロック状に堆積していることから、人為堆積である。

土層解説
1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・炭化物少少量、堆土粒子数少量
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子、堆土粒子・炭化粒子

遺物 最大で3〜4cmほどの焼けた骨片と骨粉が出土している。

所見 本遺跡は、焼けた骨片や炭化物等が出土したことから火葬土坑と思われる。焚口部と燃焼部を結ぶ溝は、燃焼部に空気を入れる通気溝と考えられる。また、ピットは、火葬にする時に陰窪を支えるための支柱の穴と思われる。時期を特定できる遺物等が出土していないことから、時期は不明である。

第2号火葬土坑（第566号）

位置 調査1区の南東部、C565区。
規模と平面形 確認面に焼けた骨片及び骨粉が検出された。掘込みは確認されなかったことから、骨片のある面が底面と思われる。規模及び平面形は不明であるが、骨片及び骨粉は、南北約1.11m、東西約0.57m長方形の広がりを持っている。
長軸方向 骨片及び骨粉の広がり方向は、N - 5° - Wである。
壁 なし。
底 あまり鈍まりがなく、赤化した場所もなかった。南方向に緩やかな傾斜をもつ。
覆土 なし。
遺物  焼けた骨片及び骨粉が出土している。
所見  骨片が焼けていることや大きな骨がないこと、同じ斜面で、南東に約17m離れて第3号火葬土坑が存在することなどから、地形（斜面）を利用して、遺骸を火葬にした施設と思われる。時期は、特定できるような遺物が出土していないので不明である。

第3号火葬土坑（第567図）
位置  調査区の南東部、C5b8区。
規模と平面形  全長（東西）1.82mで、平面形は、眼鏡状である。焼焼部は、長径0.65m、短径0.55mの楕円形、壷口部は長径1.15m、短径0.65mの楕円形である。焼焼部と壷口部の間に、長さ50cm、幅25-28cm、下幅13cmほど、深さ13〜25cmの溝が入る。
長軸方向  N-83°-W
壁  焼焼部の壁高は10cm、壷口部の壁高は20cm、ともに外頑して立ち上がる。
底  管作による揺乱がほどく、遺存している部分は少ないが、ほぼ平坦である。東側土坑に径0.40cmの円形、深さ10cmほどのビットを持つ。西側の底面は、少し赤味を帯びている。
覆土  7層からなる。ブロック状に堆積していること、焼けた骨片や炭化物が含まれることなどから人為堆積と思われる。

土層説明
1. 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子微
2. 黒褐色 ローム粒子微量
3. 黒色 炭化粒子多数、炭化物中量、骨片・骨粉微量
4. 黒色 炭化粒子中量、ローム粒子・炭化物微量
5. 黒色 ローム粒子・炭化粒子少量、炭化物微量

遺物  焼けた骨片と骨粉が、出土している。
所見  焼焼部の底面に火熱による赤化した部分があることや焼けている骨片及び骨粉が出土していることなどから、地形（斜面）を利用して火葬土坑と考えられる。時期は、特定できるような遺物が出土していないことから不明である。

第図  第3号火葬土坑実測図

第4号火葬土坑（第568図）
位置  調査区の南東部、H7a1区。
規模と平面形 長軸2.20m, 短軸0.95mの隅丸長方形である。

長軸方向 N－53°－W

壁 壁高は19cmほどで、外側して立ち上がる。南コーナー壁及び北東壁の南側が、火熱により赤化している。

底 南東方向に緩やかな傾斜を持っている。

ピット 2か所（P1・P2）。P1は長径20cm, 短径17cmの楕円形, 深さ8cmで, 壁は北方向にオーバーハングする。P2は径22cmの円形, 深さ9cmで, 壁は南方向にオーバーハングする。

P1・P2土層断解

1 褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、炭化物微量
2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭土粒子微量

覆土 6層からなる。含有物に焼土粒子や炭化粒子等が混じることや、ブロック状に堆積していることから人為堆積である。

土層断解

1 黒褐色 炭化粒子多量、炭化物・炭化物中量
2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、炭化物少量
4 黒色 炭化物・炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土から土師器片1点、須恵器片4点、覆土及び底面から焼けた骨片及び骨粉が出土している。土器片は、細片のため抽出・図示できなかった。

所見 骨片や南側の壁が焼けていることや炭化物類が多く出土していることから、遺骸を火葬にした施設と思われる。ピットは、オーバーハングしているので、支柱を差し込んだものと思われる。覆土から出土した土器は、平安時代ものと思われるが、斜面に位置することから、本跡が埋まりきらない窪地の状態時に流れ込んだものとも考えられるので、時期は不明である。

第400図 第4号火葬土坑実測図

第5号火葬土坑（第569図）

位置 調査2区の中央部、E4c5区。

重複関係 第26号溝を掘込んでいる。
規模と平面形 焼焼部は長辺1.25m，短辺0.56mの長楕円形で，その中央部西側に長軸0.32m，短軸0.13mの半円形状の焚口部を有している。焼焼部中央に通気溝と考えられる溝が入っている。通気溝は長さ0.69m，幅0.29mである。

長軸方向 N−24°−W

壁 焼焼部は深さ29cm，焚口部は深さ21cmで，ともに外懸して立ち上がる。通気溝は深さ35cm，断面形はU字状である。

底 鹹塗である。

覆土 8層からなる。焼土や炭化物が混じってブロック状に堆積していることから，人為堆積である。

土層解説
1 黒褐色 焼焼粒子中量，炭化物，炭化粒子少量，焼土粒子，炭化物微量
2 黒褐色 焼焼粒子中量，炭化物，炭化粒子少量
3 暗褐色 焼焼粒子中量，炭化物，炭化粒子少量
4 赤褐色 焼焼粒子中量，炭化物，炭化粒子少量
5 黒褐色 焼焼粒子中量，炭化物，炭化粒子少量

遺物 最大で5cmほどの骨片と骨粉が出土している。

所見 本跡は，骨片や焼土・炭化物等が出土したことから火葬土壇と考えられる。時期は，特定できる遺物等が出土していないことから不明である。

第図 第5号火葬土壇実測図

表 火葬土壇一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>住宅層番号</th>
<th>位置</th>
<th>主軸方向</th>
<th>平面形</th>
<th>規模</th>
<th>埋入深さ</th>
<th>内径</th>
<th>壁厚</th>
<th>焼口深さ</th>
<th>壁厚</th>
<th>壁厚</th>
<th>焼口高さ</th>
<th>規模</th>
<th>壁厚</th>
<th>焼口深さ</th>
<th>規模</th>
<th>壁厚</th>
<th>焼口深さ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0 0000</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>0 0000</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>0 0000</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>0 0000</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>0 0000</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
</tbody>
</table>

— 632 —
第7号井戸跡

位置　調査1区の南東部、D69区。

規模と平面形　長径1.42m、短径1.37mのほぼ円形、確認面から深さ1.62mの底面は、長径1.33m、短径1.08mの楕円形で、断面形は円錐状である。底面中央部に、平面形が円形0.90m、短軸0.70mの鯨丸長方形、深さ0.46mで、断面形がU字状の掘り込みを持つ。

覆土 　9層からなる。含有物が類似していることなどから人為堆積である。

遺物　出土していない。

所見　底面は、灰色の砂質で湿り気を持っている。Uの字状の掘りの内側にあることから中世のものと考えられるが、中央部に窪みを持つ同様の遺構の形態が他にないことなどから、時期は不明である。

第図　第7号井戸跡実測図

第9号井戸跡（第571図）

位置　調査2区の北部、C2e5区。

規模と平面形　長径1.94m、短径1.82mの円形である。断面の形状は、漏斗状であるが、崩落の危険があるため確認面から2.06mまでしか掘り下げられなかった。

覆土　12層からなり、ブロック状に堆積していることから人為堆積である。
遺物 出土していない。
所見 調査1区から検出された中世の井戸跡と形態が類似していることから、中世の可能性も考えられるが、遺物が出土していないため、時期は不明である。

第9号井戸跡実測図

第10号井戸跡（第572図）

位置 調査2区の西部、C313区。
規模と平面形 長径0.94m、短径0.86mの円形である。断面形の形状は、漏斗状である。崩落の危険のために確認面から1.38mまでしか掘り下げられなかった。
覆土 5層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積である。

土層解説
1 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、鹿沼バシス粒子数
2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、鹿沼バシス粒子数
3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、鹿沼バシス粒子数
4 黒色 ローム粒子・鹿沼バシス粒子数
5 黒色 ローム粒子、鹿沼バシス粒子数
6 白色 ローム粒子、鹿沼バシス粒子数

遺物 出土していない。
所見 調査1区から検出された中世の井戸跡と形態が類似していることから、中世の可能性も考えられるが、遺物が出土していないため、時期は不明である。

第10号井戸跡実測図

第11号井戸跡（第573図）

位置 調査2区の西部、C316区。
規模と平面形 長径1.48m、短径1.36mの円形である。円筒状に掘り込まれている。崩落の危険のために確認面から2.10mまでしか掘り下げられなかった。
覆土 7層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積である。

土層解説
1. 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2. 黒色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
3. 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4. 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5. 黒色 ローム粒子微量
6. 黒色 ローム粒子・焼土粒子微量
7. 黒色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物 糸文土器片31点、土師器片1点、須恵器片各1点が覆土中から出土している。いずれも流れ込みと考えられ、本跡に伴う遺物は出土していない。
所見 調査1区から検出された中世の井戸跡と形態が類似していることから、中世の可能性も考えられるが、伴う遺物が出土していないため、時期は不明である。

第12号井戸跡（第574図）
位置 調査2区の南部、F3e6区。
規模と平面形 長径2.32m、短径2.00mの楕円形である。断面形の形状は、漏斗状である。崩落の危険のために確認面から1.42mまでしか掘り下げられなかった。
長径方向 N - 7° - E
覆土 11層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積である。

土層解説
1. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
3. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
4. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
5. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
6. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
7. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
8. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
9. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
10. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
11. 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物 糸文土器片136点、土師器片1点、須恵器片7点が覆土中から出土している。いずれも流れ込みと考えられ、本跡に伴う遺物は出土していない。
所見 調査1区から検出された中世の井戸跡と形態が類似していることから、中世の可能性も考えられるが、伴う遺物が出土していないため、時期は不明である。

戻る
第13号井戸跡（第575図）
位置　調査2区の中央部、E3c3区。
規模と平面形　長径2.10m、短径1.95mの円形である。断面形の形状は、漏斗状である。崩落の危険のために確認面から1.85mまでしか掘り下げられなかった。
覆土　12層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積である。

遺物　編文土器片118点、土師器片15点、須恵器片16点が覆土中から出土している。いずれも流れ込みと考えられ、本跡に伴う遺物は出土していない。

表　① 時期不明井戸跡一覧表

第○○図　第○○号井戸跡実測図

第1節　調査1区から検出された中世の井戸跡と形態が類似していることから、中世の可能性も考えられるが、伴う遺物が出土していないため、時期は不明である。
第8号溝（第576図・付図）

位置 調査1区南端、C5g1〜C5j3区。

重複関係 第9号溝と重複しているが、耕作による摂乱のため新旧関係は不明である。

形状と規模 斜面部分に位置するために南部は検出できなかった。検出できた長さは14.52m、幅1.08〜1.24cm、幅0.24〜0.54cm、深さ17〜28cmである。断面形はゆるやかなU字形である。

方向 南部は検出できなかったが、南方向（N〜151°E）に直線的に延びると思われる。

覆土 単一層である。覆土が薄いことから堆積状況は不明である。

遺物 瓦質土器1点、土師質土器片1点、陶器片6点が出土している。うち瓦質土器1点、陶器片1点を抽出・図示した。1点の瓦質土器、香炉と2点の陶器検体、ともに覆土中から出土している。

第8号溝出土遺物観察表

| 遺物番号 | 見積 | 計測値（ミリ） | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 発掘・色調・焼成 | 考
|----------|------|--------------|-----------|-------------|----------------|---
| 第1110号 | 瓦器 | □ □ □ □ □ □ | 底部に含まれる小さな破片、形状、表面に変形の部が付く。 | 体部内・外部ナデ、表面薬物付け、 | 頭・長石・長石類灰色普通 | P □ □ □ □ □ |
|          | 瓦器 | □ □ □ □ □ □ | 底部に含まれる小さな破片、形状、表面に変形の部が付く。 | 体部内・外部ロク・黒色、表面変形の部が付く。 | 頭・長石・長石類灰色普通 | P □ □ □ □ □ |

所見 中世（瓦質土器香炉）や近世（瀬戸・美濃焼等）と時期幅がある遺物が出土している。本跡南部が検出されていないことなどを考えると、時期及び性格は不明である。

第9号溝（第577図・付図）

位置 調査1区の南部、C4g7〜C5j2区。

重複関係 第56〜46号住居跡を掘り込んでいる。第8号溝と重複しているが、耕作による摂乱のため新旧関係は不明である。

形状と規模 平面形は南を向くU字型で、南北方向に走る東側は斜面部分のために南部は検出できなかったが、東側としても調査区域内に延びると思われる。検出できた長さは61.96m、幅0.60〜1.45cm、幅0.10〜0.60cm、深さ35〜66cmである。断面形はU字型ないし箱状が共存している。

方向 1区南端から北西方向（N〜37°〜W）に向かい、C4e9区で北東方向（N〜24°〜E）に屈曲する。
さらに、C4e9区で南東方向（N〜124°〜E）に屈曲する。

覆土 2〜3層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

土層発見（SPA-A'）4区
1 黒褐色 ローム・土粒子・ローム中ブロック・ヘザー
2 黒褐色 ローム中ブロック・ヘザー粒子・泥

土層発見（SPB〜B'）2区南側
1 黒褐色 ヘザー中ブロック・ヘザー粒子
2 黒褐色 ヘザー中ブロック・ヘザー粒子・泥
遺物 灰釉陶器1点、土師質土器18点、陶磁器23点が出土している。うち灰釉陶器1点、陶器4点、磁器1点を抽出、図示した。1の灰釉陶器壷片、2～6の陶磁器片は、覆土中から出土している。

所見 古代から近現代までの時期幅がある遺物が出土している。「天王様」と呼ばれる同の周囲をU字状に続 ることから、それに関連する区画線と思われるが、時期は不明である。

第9号溝・出土遺物実測図

第9号溝出土遺物観察表

<table>
<thead>
<tr>
<th>器名</th>
<th>器種</th>
<th>計測値 (cm)</th>
<th>器形の特徴</th>
<th>手法の特徴</th>
<th>色調・焼成</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>器1</td>
<td>灰釉陶器</td>
<td>甲型</td>
<td>底部・前部、断面台形の高台が付く。</td>
<td>線・砂粒・長石</td>
<td>灰白色</td>
<td>普通</td>
</tr>
<tr>
<td>器2</td>
<td>陶器</td>
<td>甲型</td>
<td>口縁部、囲むする。折返し口縁で、縁部は広い粘土絞が付する。</td>
<td>線・長石・石英</td>
<td>ふる赤褐色</td>
<td>普通</td>
</tr>
<tr>
<td>器3</td>
<td>陶器</td>
<td>甲型</td>
<td>口縁部、裏面は粘土絞が付する。</td>
<td>線・長石・石英</td>
<td>ふる赤褐色</td>
<td>普通</td>
</tr>
<tr>
<td>器4</td>
<td>陶器</td>
<td>甲型</td>
<td>口縁部、裏面は粘土絞が付する。</td>
<td>線・長石・石英</td>
<td>ふる赤褐色</td>
<td>普通</td>
</tr>
<tr>
<td>器5</td>
<td>陶器</td>
<td>甲型</td>
<td>口縁部、裏面は粘土絞が付する。</td>
<td>線・長石・石英</td>
<td>ふる赤褐色</td>
<td>普通</td>
</tr>
<tr>
<td>器6</td>
<td>陶器</td>
<td>甲型</td>
<td>口縁部、裏面は粘土絞が付する。</td>
<td>線・長石・石英</td>
<td>ふる赤褐色</td>
<td>普通</td>
</tr>
</tbody>
</table>

- 638 -
第11号溝（第578号·付図）
位置 調査3区の中央部及び4区の北西部，G23-G3b8区
重複関係 第62・73両号住居跡を掘り込んでいる。また，第786号土坑と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。
形状と規模 3区中央部の西端から直線的に東端に向かって，調査区域外の町道部分を経由し，4区に11.5mほど延びる。検出できた長さは約43.5m，上幅0.50〜1.28cm，下幅0.30〜0.64cm，深さ12〜50cmである。断面形はU字状である。
方向 東方向（N-76°E）に直線的に延びる。
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

第15号溝（第579号·付図）
位置 調査4区の北部，G3b9-5h1区
重複関係 第88号住居跡及び第817号土坑を掘り込んでいる。また，第15号地下式溝及び第16号溝と重複しているが，本跡との新旧関係は不明である。
形状と規模 4区の東端で調査区域外に延びる。検出された長さは，50.32m，上幅0.70〜1.80cm，下幅0.26〜0.70cm，深さ52〜60cmである。断面形はU字状である。
方向 東方向（N-76°E）に直線的に延びる。
覆土 2〜5層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物 土師器や須恵器片が出土している。住居跡と重複する付近の覆土上層から出土していることから，住居跡を掘り込んでいることによるものと思われる。

所見 本跡に伴うと思われる遺物が出土していないために，時期は不明である。本跡は4区まで延びて途切れるが，途切れた所から東側に90cmほど離れて，第15号溝が，東方向に延びている。本跡と第15号溝は，3区の西端から4区の東端にかけて，一直線に延びていることから関連する溝と思われる。
類似していることや、これら3条の溝（第11・15・18号）を結ぶと4区の谷部をL字状に囲むようになることなどから関連性も考えられるが、性格は不明である。

第22号溝（第580図）
位置 調査2区北部、C2a9～B3h1区。
形状と規模 長さは17.0mで、上幅26～62cm、下幅12～47cm、深さ11cmである。断面は皿状である。
方向 C2a9区から東方向（N－141°－W）に直線的に延びる。

覆土 2層からなる。覆土が薄いことから堆積状況は不明である。

遺物 縄文土器片16点を覆土中から出土している。いずれも流れ込みと考えられ、本跡に伴う遺物は出土していない。

第24号溝（第581図）
位置 調査2区南部、F3c3～F3h9区。
重複関係 第12号井戸、第204号住居跡、第58号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

形状と規模 南東方向に調査区外に延びるため、検出できた長さは29.2mで、上幅36～64cm、下幅22～50cm、深さ20～22cmである。断面はゆるやかなU字形である。
方向 F3c3区から南東方向（N－130°－E）に直線的に延びると思われる。

覆土 3層からなる。覆土が薄いことから堆積状況は不明である。

遺物 縄文土器片62点、土師器片2点、須恵器片1点、陶器片1点が覆土中から出土しているが、いずれも流れ込みと考えられ、本跡に伴う遺物は出土していない。
所見 時期及び性格は不明である。

第25号溝（第582図）
位置 調査2区中央部、E3b2～E3d0区。
形状と規模 西方向が調査区域外に延びるものと思われるか、検出できた長さは31.85mで、上幅84～102cm、下幅34～68cm。深さ5～14cmである。断面は皿状である。
方向 E3d0区から西方向（N−80°−W）に直線的に延びると思われる。
覆土 単一層である。覆土が薄いことから堆積状況は不明である。

第26号溝（第583図）
位置 調査2区中央部、E4c3～E4c6区。
重複関係 第5号火葬土坑を掘り込んでいる。
形状と規模 東方向が調査区域外に延びるものと思われ、検出できた長さは13.2mで、上幅58～84cm、下幅30～54cm、深さ15cmである。断面は皿状である。
方向 E4c5から北東方向（N−75°−E）に直線的に延びると思われる。
覆土 単一層である。覆土が薄いことから堆積状況は不明である。

第27号溝（第584図）
位置 調査2区北部、D2c6～D2e8区。
形状と規模 北西方向が調査区域外に延びるものと思われ、検出できた長さは11.5mで、上幅112～162cm、下幅58～90cm、深さ14cmである。断面は皿状である。
方向 D2e8区から北西方向（N−30°−W）に直線的に延びると思われる。
覆土 3層からなる。覆土が薄いことから堆積状況は不明である。

所見 時期及び性格は不明である。
表 64 時期不明溝一覧表

7 土坑・土壇基

今回の調査で、時期不明の366基の土坑が検出された。そのうち、人骨及び遺物を伴う土壇基と考えられる2基について記載し、その他は一覧表で報告する。

第3号土壇基（第585図）

位置 調査1区の北東部、B3e6区。

規模と平面形 長径1.41m、短径0.82mの橢円形で、確認面からの深さは13cmである。

長径方向 N - 8° - W

壁 なだらかに立ち上がる。

底面 平坦である。
覆土 2層からなる。堆積状況は不明である。

土層解説
1 暗褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子多量

遺物 人骨1点及び骨片、煙管の雁首が出土している。骨は西壁際、骨片は南壁際の底面から、煙管の雁首は覆土中から出土している。

所見 人骨及び煙管の雁首が出土していること、遺構の規模や形態などから土坑墓と考えられる。正確な時期は不明であるが、煙管の雁首が出土していることから、近世以降と考えられる。

第2図 第3号土坑墓・出土遺物実測図

第3号土坑墓出土遺物観察表

<table>
<thead>
<tr>
<th>被覆図号</th>
<th>番号</th>
<th>記号</th>
<th>長さ (cm)</th>
<th>幅 (cm)</th>
<th>厚さ (cm)</th>
<th>重量 (g)</th>
<th>材質</th>
<th>特徴</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第2図</td>
<td>煙管</td>
<td>O</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

第5号土坑墓（SK743）（第586図）

位置 調査1区の中央部、C5a2区。

重複関係 第1号墳に挟まれている。第661号土坑と重複しているが、本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形 北西部の下部が残存しているのみで、正確な規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明である。

壁 北西壁が残存しており、なだらかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり、不規則な堆積状況を示していることから人为堆積である。

土層解説
1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

第3図 第5号土坑墓実測図
遺物 人骨4点及び骨粉が出土している。うち、1点は一部の残る頭骨で、北西面から出土している。
所見 人骨が出土していること及び覆土が人為堆積であることから、土坑墓の可能性が考えられる。人骨以外に出土遺物がなく、時期は不明である。

### 表 01 時期不明土坑墓・土坑・ビット一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>土坑番号</th>
<th>位置</th>
<th>長径方向</th>
<th>平面形</th>
<th>角</th>
<th>細 様</th>
<th>壁厚</th>
<th>覆土</th>
<th>主な出土遺物</th>
<th>重複関係</th>
<th>発見番号</th>
<th>番号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>土坑1</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>短円形</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑2</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>短円形</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑3</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>短円形</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>不明</td>
<td>第Ⅰ号地下式横と重複</td>
<td>01号</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑4</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑5</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑6</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>短円形</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>不明</td>
<td>第Ⅰ号地下式横と重複</td>
<td>01号</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑7</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑8</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑9</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>短円形</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>不明</td>
<td>第Ⅰ号地下式横と重複</td>
<td>01号</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑10</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑11</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑12</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑13</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑14</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑15</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑16</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑17</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑18</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑19</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑20</td>
<td>0-0.0-0</td>
<td>長方形单</td>
<td>0.0</td>
<td>0.0</td>
<td>縮斜</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>本跡</td>
<td>1</td>
<td>01号</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

---

発見番号 01号
<table>
<thead>
<tr>
<th>土 建番号</th>
<th>位置</th>
<th>長径方向</th>
<th>平面形状</th>
<th>规模</th>
<th>墓径</th>
<th>底径</th>
<th>顶高</th>
<th>主な出土物</th>
<th>棟体関係</th>
<th>発掘番号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>049 001</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>- 円形</td>
<td>不整形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>外郭</td>
<td>甲組</td>
<td>乙組</td>
</tr>
<tr>
<td>049 002</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>- 円形</td>
<td>不整形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>外郭</td>
<td>甲組</td>
<td>乙組</td>
</tr>
<tr>
<td>049 003</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>- 円形</td>
<td>不整形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>外郭</td>
<td>甲組</td>
<td>乙組</td>
</tr>
<tr>
<td>049 004</td>
<td>0 - 0 - 0</td>
<td>- 円形</td>
<td>不整形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>まっ円形</td>
<td>外郭</td>
<td>甲組</td>
<td>乙組</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>土坑番号</th>
<th>位置</th>
<th>長径方向</th>
<th>深さ</th>
<th>覆面</th>
<th>骨面</th>
<th>覆土</th>
<th>主な出土遺物</th>
<th>重複関係</th>
<th>発掘番号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>G92</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>G70/G68/G70</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>G70</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土坑番号</td>
<td>長径方向</td>
<td>平面形</td>
<td>長径(延長100m)</td>
<td>深さ(延長100m)</td>
<td>壁面</td>
<td>底面</td>
<td>端土</td>
<td>主な出土遺物</td>
<td>重複関係</td>
</tr>
<tr>
<td>----------</td>
<td>-----------</td>
<td>--------</td>
<td>----------------</td>
<td>----------------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>------</td>
<td>---------------</td>
<td>----------</td>
</tr>
<tr>
<td>001</td>
<td>0... 0...</td>
<td>円形</td>
<td>平均100m</td>
<td>50m</td>
<td>外縁</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>自然</td>
<td>未確認</td>
</tr>
<tr>
<td>002</td>
<td>0... 0...</td>
<td>円形</td>
<td>平均100m</td>
<td>50m</td>
<td>外縁</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>不明</td>
<td>未確認</td>
</tr>
<tr>
<td>003</td>
<td>0... 0...</td>
<td>円形</td>
<td>平均100m</td>
<td>50m</td>
<td>外縁</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>不明</td>
<td>未確認</td>
</tr>
<tr>
<td>004</td>
<td>0... 0...</td>
<td>円形</td>
<td>平均100m</td>
<td>50m</td>
<td>外縁</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>不明</td>
<td>未確認</td>
</tr>
<tr>
<td>005</td>
<td>0... 0...</td>
<td>円形</td>
<td>平均100m</td>
<td>50m</td>
<td>外縁</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>不明</td>
<td>未確認</td>
</tr>
<tr>
<td>006</td>
<td>0... 0...</td>
<td>円形</td>
<td>平均100m</td>
<td>50m</td>
<td>外縁</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>不明</td>
<td>未確認</td>
</tr>
<tr>
<td>007</td>
<td>0... 0...</td>
<td>円形</td>
<td>平均100m</td>
<td>50m</td>
<td>外縁</td>
<td>平坦</td>
<td>人為</td>
<td>不明</td>
<td>未確認</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(目次)

---

468

(戻る)
<table>
<thead>
<tr>
<th>土坑番号</th>
<th>長径方向</th>
<th>平面形</th>
<th>规模</th>
<th>覆面</th>
<th>埋葬入数</th>
<th>主な出土遺物</th>
<th>重複関係</th>
<th>発掘番号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>000 000</td>
<td>不整円形</td>
<td>15cm×10cm</td>
<td>0</td>
<td>植木</td>
<td>2</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>000 000</td>
<td>検円形</td>
<td>15cm×10cm</td>
<td>0</td>
<td>植木</td>
<td>2</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>000 000</td>
<td>不整円形</td>
<td>15cm×10cm</td>
<td>0</td>
<td>植木</td>
<td>2</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>000 000</td>
<td>長方形</td>
<td>15cm×10cm</td>
<td>0</td>
<td>植木</td>
<td>2</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>000 000</td>
<td>不整円形</td>
<td>15cm×10cm</td>
<td>0</td>
<td>植木</td>
<td>2</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>000 000</td>
<td>不整円形</td>
<td>15cm×10cm</td>
<td>0</td>
<td>植木</td>
<td>2</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>000 000</td>
<td>不整円形</td>
<td>15cm×10cm</td>
<td>0</td>
<td>植木</td>
<td>2</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
<td>不明</td>
</tr>
<tr>
<td>土 建 番 号</td>
<td>位置</td>
<td>長経方向</td>
<td>平面形</td>
<td>规 模</td>
<td>場面</td>
<td>底面</td>
<td>種主出士遺物</td>
<td>重 複 関 係</td>
</tr>
<tr>
<td>-----------</td>
<td>------</td>
<td>----------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>----------------</td>
<td>----------</td>
</tr>
<tr>
<td>023456</td>
<td>0 - 0</td>
<td>椋 円形</td>
<td>023456</td>
<td>椋 023456</td>
<td>椋 023456</td>
<td>椋 023456</td>
<td>椋 023456</td>
<td>椋 023456</td>
</tr>
</tbody>
</table>

---

(目次)
<table>
<thead>
<tr>
<th>土坑番号</th>
<th>位置</th>
<th>長径方向（掘削方向）</th>
<th>平面形</th>
<th>円形</th>
<th>深さ（m）</th>
<th>塀面</th>
<th>職土</th>
<th>主な出土遺物</th>
<th>重複関係</th>
<th>発掘番号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>0.9m-0.8m</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>0.8m-0.9m</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>0.8m-0.7m</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>0.7m-0.8m</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>0.7m-0.6m</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>0.6m-0.7m</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>0.6m-0.5m</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>0.5m-0.6m</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
<td>梯 円形</td>
</tr>
</tbody>
</table>
第8節 遺構出土遺物

今回の調査では、遺構に伴わない遺物が多数出土している。ここではそれらの遺物のうち、弥生時代から中・近世の遺物で特徴のあるものについて図示・解説する（第587～590図）。
第 表図  遺構外出土遺物実測図 (2)
第図 遺構出土遺物実測図（３）
第図  遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表

<table>
<thead>
<tr>
<th>遺品番号</th>
<th>器種</th>
<th>補修値</th>
<th>器形及文様の特徴</th>
<th>補土・色調・焼成</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第01號</td>
<td>小形急製形土器</td>
<td>平底</td>
<td>胴部から底部にかけての破片。平底。器部は内壁気に円形に外傷して立ち上がる。 &lt;/br&gt;器部には、附加条二種（附加1条）の焼成が施され、羽毛構成をとる。</td>
<td>長石・石英に付い黄褐色普通</td>
<td>P0000 00%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>遺品番号</th>
<th>器種</th>
<th>補修値</th>
<th>器形の特徴</th>
<th>手法の特徴</th>
<th>補土・色調・焼成</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第02號</td>
<td>平底土器</td>
<td>土師器</td>
<td>口部及び体部一部欠損。肉厚の平底。器部は直線的に外側にして立ち上がる。</td>
<td>体部内・外側模様によるナデ。</td>
<td>長石・石英</td>
<td>P0000 00%</td>
</tr>
<tr>
<td>図版番号</td>
<td>器種</td>
<td>計画値</td>
<td>器形の特徴</td>
<td>手法の特徴</td>
<td>色土・色調・焼成</td>
<td>備考</td>
</tr>
<tr>
<td>----------</td>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>-------------</td>
<td>-------------</td>
<td>----------------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>第18図</td>
<td>土射器</td>
<td>□ □</td>
<td>火焚き焼器。火口は直立する。底部がつく。</td>
<td>火焚き内面ナデ。外部へら削り後、ナデ。</td>
<td>長石・石英、小片状土器。橙色、普通</td>
<td>P □□ □ 5％</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>土射器</td>
<td>□ □</td>
<td>底部から縁部部片、平底、顶部は内傾しながら外傾して立ち上がり、</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。外部へら削り後、内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、橙色、普通</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>土射器</td>
<td>□ □</td>
<td>体部から縁部部片、体部は内傾しながら外傾して立ち上がり、</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>土射器</td>
<td>□ □</td>
<td>体部から縁部部片、体部は内傾しながら外傾して立ち上がり、</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>土射器</td>
<td>□ □</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>土射器</td>
<td>□ □</td>
<td>体部から縁部部片、体部は内傾しながら外傾して立ち上がり、</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>高台付土射器</td>
<td>□ □</td>
<td>体部から縁部部片、平底、顶部は平</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>体部及び縁部部片、平底、顶部は平</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>体部及び縁部部片、平底、顶部は平</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>体部及び縁部部片、平底、顶部は平</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>体部及び縁部部片、平底、顶部は平</td>
<td>縁部及び内部面内面ナデ。内部面ナデ。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>底部に平底。</td>
<td>底部へら削り。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>底部に平底。</td>
<td>底部へら削り。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>底部に平底。</td>
<td>底部へら削り。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
<tr>
<td>□</td>
<td>順器</td>
<td>□ □</td>
<td>底部に平底。</td>
<td>底部へら削り。</td>
<td>長石・石英、内面ナデ。</td>
<td>体外外部焼墨「白」</td>
</tr>
</tbody>
</table>

---

- 656 -
| 图案编号 | 图案材质 | 图案名称 | 图案形状的特征 | 手法的特征 | 颜色 | 考考
|----------|---------|----------|----------------|-----------|------|------|
| 第1图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第2图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第3图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第4图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第5图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第6图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第7图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第8图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第9图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%
| 第10图 | 钢 | 酸蚀 | 金属片 | 酸蚀 | 黑色 | P 100%

---

以上内容为示例，不代表实际文档内容。
<table>
<thead>
<tr>
<th>図版番号</th>
<th>器種</th>
<th>計測値</th>
<th>材質</th>
<th>特 徴</th>
<th>備 考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第 1 図</td>
<td>灰 粪 陶 器</td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
<td>土 製</td>
<td>断面三角形。</td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>□ □</td>
<td>土 製</td>
<td>断面三角形。</td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>□ □</td>
<td>土 製</td>
<td>断面は球状。</td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
</tr>
<tr>
<td>第 2 図</td>
<td></td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
<td>土 製</td>
<td>断面形を削る前に前に削る前に</td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>□ □</td>
<td>土 製</td>
<td>断面は球状。</td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
</tr>
<tr>
<td>第 3 図</td>
<td></td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
<td>土 製</td>
<td>断面は球状。</td>
<td>□ □ □ □ □ □</td>
</tr>
</tbody>
</table>
第9節 ま と め

宮後遺跡は、縄文時代から中・近世にわたる複合遺跡であることが明らかになり、特に縄文時代中期中葉から後業、弥生時代終期後半から古墳時代前期、さらに奈良時代から平安時代にかけて大きな集落が形成されたことが確認された。本書は取り扱った時代は、このうち弥生時代から中・近世までである。ここでは、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代及び中・近世の調査成果を概観し、まとめとする。

1 弥生時代～古墳時代

当遺跡からは、弥生土器だけが出土し住居跡1軒、弥生土器と古墳時代前期の土師器が一緒に出土した住居跡4軒、古墳時代前期の土師器が出土した住居跡8軒、古墳時代後期の土師器が出土した住居跡2軒が検出されたが、検出数が少ないので、当遺跡が位置する沿岸前川沿いの遺跡から考えてみたい。沿岸前川沿いには、大塚遺跡、矢倉遺跡、桜の郷遺跡群（石原遺跡・楠山遺跡・大塚遺跡）等の弥生時代後期後半の遺跡が多く分布し、県北部から中央部にかけてを中心に分布する弥生台式土器が出土している。各遺跡を概観してみると、大塚遺跡や矢倉遺跡では弥生土器（十王台式）と土師器との共伴事例はなかったが、上流に位置する石原遺跡や当遺跡ではその事例が見られた。海老澤氏の十王台式編年をもとに弥生時代後期後半と弥生時代後期後半～古墳時代前期に分け、その出土土器の特徴及び文様に焦点を当てて述べることとする。

（1） 弥生時代後期後半

当該期の遺構は、第126号住居跡の1軒である。小支谷を挟んで楠山遺跡（石原遺跡と隣接）と対峙する標高28～29Mの5区の平坦部に構築されている。石原遺跡では、10数軒（第2・4・12号住居跡等）が検出され、中央に広場をもつ4・5軒の小グループに分けられるようであると記述されていることから、奈良・平安時代に住居や掘立柱建物等の建設で掘り込まれなければ、当遺跡の小支谷を見下ろす台地の平坦部にも小さなおもとまりをもった住居群の存在が確認されたのではないかと考えられる。土器の編年から当遺跡より先に形成されると思われる大塚遺跡や矢倉遺跡は沿岸前川に面した台地の縁辺部に立地しているが、石原遺跡や本遺跡は沿岸前川に流れ込む支流（小橋川）沿いに立地している。このことは人口の増加などにより土地を求めて川沿いに拡大することによるもの（第591図「宮後遺跡及び周辺遺跡」参照）と考えられる。遺物は広口壷・片口鉢・炉石・環状石斧などが出土している。片口鉢（第592図13）は、色調が橙色を帯び、胎土に針状結晶を含んでいることなど広口壷片との違いが見られる。また、口部に付近に孔が2つ空けられており、木製か革製の蓋を留める穴と思われる。石原遺跡でも2個体出土しているが、全体的に出土数が少ないことから貴重なものを入れていたことも考えられる。また、この期の広口壷（第592図14・15）は、2点しか出土していないが、14の広口壷の頭部文様は、縦描文が密に胴部の最大径の近くまで施文されていることから矢倉遺跡の第14・23号住居跡（第
592図1～3）、石原遺跡の第5号住居跡（第592図4～6）出土の土器と同時期のものと思われる。住居の規模と平面形は、矢倉遺跡の第14号住居跡が長軸6.1m、短軸5.4mの隅丸方形、第23号住居跡が長軸3.8m、短軸3.5mの隅丸方形、石原遺跡の第5号住居跡が長軸5.58m、短軸4.55mの隅丸長方形で、当遺跡の第125号住居跡は長軸3.74m、短軸3.70mの隅丸方形である。このようにこの時期は、隅丸方形と隅丸長方形が併存することが観われる。

特筆する遺物として環状石斧があげられる。5区の遺構外から出土したものではあるが、完形品は本県で初出である。
（2）弥生時代後期後半〜古墳時代前期初頭

次に、弥生土器と古墳時代前期の土師器が一緒に出土した住居は、第101・103・110・121号住居跡の4軒である。弥生時代後期後半の住居跡と同様に、当遺跡の南部（5区）の平坦部の中央に位置し、南北に弧状に並んでいた。平面形は、不明1軒を除き、隅丸長方形である。石原遺跡でも共伴事例が第23号住居跡（第592図6〜12）などに見られる。第592図7の広口壷は口縁部の幅が広く、頸部の隆帯がほとんど隆起していない。また、頸部の横綱文が胴部の最大径近くまで施文されている。当遺跡の広口壷（第593図1・2・5・6）も石原遺跡と同様な文様構成をもち、特に第593図5の広口壷の頸部と胴部の境の隆帯が半載竹管状の工具で刺突された爪形文に変化している。ひたかね市弓田石高遺跡の第41号住居跡でも爪形文をもつ土器が出土し、土師器を伴っている。また、第593図3・4のような器高のある広口壷も、石原遺跡の第23号住居跡（第592図8）等から出土しており、頸部の文様構成が類似しており、この点からも二つの住居跡が同時期といえる。とところで、広口壷の用途を考えてみると、器高が30cm前後より以下のもののに多く、二次焼成痕があったり、炭化物・スズが付着していたりすることが見られ、第592図3・4のような50cm以上の大形のものにはその痕跡
は見受けられなかった。このことから中形・小形のものは煮炊き具として、大形のものはそれ以外の用途として、というように機能が分かれていたことが窺える。

土師器と一緒に出土した弥生土器の全体的な特徴は、①口唇部に小突起がつくものが多く見受けられる。②頸部文様帯の縄索花が2本のものが多い。③頸部と胴部間の区画は、横走波状文がほとんどである。①底部は目を引くことが多く見える。この傾向は矢倉遺跡や石原遺跡でも見えて、久慈川流域出土の弥生土器と様相を異にしていることから溜沼前川流域の弥生時代後期後半の弥生土器に共通する特徴と思われる。

ところで、当遺跡と同様に弥生土器と土師器が共伴した遺跡には、石原遺跡以外に石岡市外山遺跡、大洗町長崎遺跡、水戸市長崎町遺跡、ひたちなか市倫ノ川遺跡、平成9年度に調査された大塚遺跡や鶴崎遺跡などがある。弥生土器は、以前したように上台式土器の終わりの様相を呈している。一方の土師器は、第593図の8～10のようにハケ目の持つものが多いが、第593図7のように見受けられないものもある。第593図8の壺は胴部の下部に最大径を持ち、口唇部は小波状を呈するかが特徴的である。口唇部が小波を呈する土器は、石原遺跡からも出土しており、さらに波状が強くなった土器が、当遺跡から南西に3.4kmほど離れた古墳時代前期の集落である南小割遺跡から数多く出土している。南小割遺跡出土の強く波状を呈する土師器は、弥生土器を伴っていないことなどから当遺跡より後の時期とも考えられ、関連性が注目される。第110号住居跡の弥生土器と共伴した土師器は、外山遺跡の第5号住居跡から弥生土器と一緒に出土した土師器の様相と類似していることも記しておくべき。

（３） 古墳時代前期

次に、土師器だけが出土した住居は、古墳時代前期（4世紀代）の炉をもつ竪穴住居跡9軒である。調査区北部（1区）に5軒、南部（5区）に4軒である。小橋川や小支谷を望む台地の縁辺部に沿って立地し、南北に二つのグループに分かれる。住居の平面形は、（隅）方形が5軒（第1・37・38・104・129号）、（隅）長方形が3軒（第31・41・102号）、不明が1軒で、南北での形状の違いは見られない。規模は、長軸が長くても5mで、100号住居跡は、長軸8.14m、短軸7.34mと大きく、遺物として手捏土器（10個体以上）及び土玉（4個）が出土していることが注目される。祭祀のことをや溜沼前川や小橋川に挟まれたこの地で、漁労が行われていたことが想定できる。出土土器の様相からみて、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭から継続して、集落が営まれたことが窺える。

4世紀末には2度目の集落の終わりを迎え、古墳時代中期（5世紀代）から後期（6世紀代）の遺構は検出されない。しかし、石原遺跡では中期（5世紀代）の住居跡が、潮山遺跡や大塚遺跡では後期（6世紀代）の住居跡がそれぞれ検出されており、集落の移動を小橋川と溜沼前川に挟まれた地域で考える必要がある。

（４） 古墳時代後期

途絶えて後の古墳時代後期（7世紀代）になってからの遺構としては、調査1区の西部から住居跡1軒（第3号住居跡）と、2区の南部から1軒（第143号住居跡）が検出された。遺物としては土師器壺や長舌の壺が出土している。

2 奈良・平安時代

奈良・平安時代の主な遺構は、竪穴住居跡117軒・竪穴状遺構1基・掘立柱建物跡63棟・土壇25基・溝1条・粘土採掘坑5基である。この時代は大きな集落が形成された時期で、多くの土器が出土している。住居跡から出土した土器を1～4期の6期に区分し、その変遷を把握し、各時期の様相を述べていくことにする。

～663～
（1）奈良・平安時代の土器の変遷

ここでは当時代の土器を、この時代のはば全体にわたってみられる須恵器部の変化を中心に分類し、その変
遷をみていくことにする。

なお、変については形態や調整技法によって以下のように分類した。

土師器変A類 丸底で半球形状を呈するもので、口縁部が内彎、外傾、直立するものがある。体部外面に
手持ちヘラ削りを施すものである。

B類  平底で体部が内彎気味に立ち上がるもので、口縁部が外傾、外反するものがある。体部外
面に手持ちヘラ削りを施すものである。

C類  丸底もしくは平らな丸底で、底部と口縁部の塩に稜を持つもの。体部外面に持ちヘラ削
りを施すものである。

D類  平底で体部が内彎気味に立ち上がるもので、口縁部が外傾、外反するものがある。ロクロ
足形のものである。

須恵器変A類 丸底で口径と径の差が小さく、底部外周に段があり、いわゆる二次底部面を有するもの。

B類  平底で口径と径の差が小さく、底部外周に段があり、いわゆる二次底部面を有するもの。

C類  B類以外で平底のもの。

I期（８世紀前葉）

食器類は、土師器が目立つ段階である。

須恵器変は丸底のA類、平底のB類、C類がみられる。

A類及びB類の底部及び外周部には、回転ヘラ削りが施されている。

C類は、いずれも底部に回転ヘラ削りが施されている。

A類・B類の変は、大・中・小が確認され、大形が口径約14cm、中形が口径12cm、小形が口径約10cmであ
る。

土師器変は丸底で半球形状を呈するA類（1〜4）、平底で体部が内彎気味に立ち上がるB類（5〜8）、丸
底で口縁部との塩に稜を持つC類（9〜12）がみられる。いずれの変も体部外面もしくは底部には持ちヘラ
削りか、口縁部には横ナデが施されている。A類のなかには黒色処理のされているもの（3）、B類のなかに
は底部に木葉模を残すもの（5）がみられる。

須恵器変は、須恵器変の大形と中形のものの口径と合うものが出土しており、それぞれの変とセットになる
ものと思われる。口縁部にかいりが付くものと、口縁端部がわずかに塩下するものがある。

形態的にかいりが付くものから、底部がわずかに塩下するものへと移行すると思われるが、当遺跡では両者が共伴するた
め明確に時期差として区別できないため、当該期に含めた。いずれの変も平らなつまみが付け、天井部からな
だからに口縁部に至るもの、直線的に口縁部に至るもの、全体的に低く扁平なもののがみられる。

須恵器高台付変は、低い高台が底部の外側に付いており、高台径が大きい。当該期で1点認められる（34）。

煮沸具・貯蔵具は須恵器より土師器の占める割合が非常に多い。

土師器瓶は体部が内彎気味に、または、直線的に立ち上がり、口縁部が外反するものである。口縁部は外反
度合いの弱いもの（39・41）と強いもの（38・40）がある。底部が確認できるものは1点のみであり、無底
式である。調査は、口縁部が横ナデ、体部が横ナデまたは縦位のヘラ削りである。

土師器壷は、体部上位に最大径を持ち脇に張りのあるもので、口縁部のつまみ上げは明瞭でない。胴部下半
に縦位のへら磨きが、胴部下端に手持ちへら削りが施されている（37）。

須恵器釜は、破片であり、全容は不明である。縦位の平行叩きが施された体部片のほか、口縁上部に断面三角形の隆起をもち、体部外面に同心円叩きが施されたものもみられる。

その他に、須恵器円面砚（36）、同小形鉢（35）が出土している。

第8図 宮後遺跡II期の土器群

II期（8世紀中葉）

食器類は、土器類が少なくなり須恵器が大部分を占めるようになる。

須恵器釜は平底のB類（5〜7）・C類（8〜10）がみられる。前段階と同様に大（5・8）・中（6・9）・小（7・10）に分けられ、大形が口径約14cm、中形が口径約12cm、小形が口径約10cmである。いわゆる二次底
部面を有するB類の底部周縁は、回転ヘラ削りを施したもののがみられる。B類及びC類の底部は、回転ヘラ削りを施したものが多く、ほかに回転ヘラ切り後、ナデまたはヘラナデを施したものもみられる。

土器類は中底のA類（1〜3）、中底のB類（4）がみられる。いずれも体部外面または底部にヘラ削りが、口縁部には横ナデが施されている。A類にはヘラ磨きが施され内面黑色処理されたもの（2）もみられる。

須恵器高台付壷は、当該期から増加する。高台は前段階のものより高くなり、より底部の内側につけられる。口縁部は、外反するもの（17）と、外反するもの（16）がみられる。高台付壷は、大（16）、中（17）、小（20）に分けられ、大形が口径約19cm、中形が約口径16cm、小型が口径約13〜14cmである。

須恵器蓋は、天井部はやや扁平であり、口縁端部は短く垂下している。つまみが確認できるものは1点で、扁平な擬宝珠状である。口径は、約20cmのもの、約16cmのもの、約14cmのもの、約12cmのものに分けられ、口径が約16cmのものは須恵器高台付壷とセットになるものと思われる。

第34図 宮後遺跡第2期の土器群
煮沸具・貯蔵具は前段階に比べて、須恵器の占める割合が若干多くなってくる。須恵器甌（27）、鉢（30）、短頸壺（29）が新たに確認される。

土師器爨は、破片であり全容は不明であるが、体部下部に縄位のヘラ磨きが施されているもの（26）が確認されている。口縁部のつまみ上げは、前段階より明瞭になってくる（22～25）。また、当該期から体部下部に縄位のヘラ削りが施されている小形爨がみられる（21）。

須恵器爨も、破片であり全容は不明であるが、前段階と同様に外面に同心円押きが施されたものも認められる（28）。

須恵器甌は、外面に縄位の平行押き、下端にヘラ削りが施された無底式のものである。

3期（8世紀後葉）

食器具は、当該期において、須恵器の占める割合が非常に多くなり、器種も豊富になる。

須恵器窯はC類が中心となり、当該期において、前段階の浅身の窯に加えて、深身のものがみられるようになる（3～6）。計測値は、口径13～14cmのものがほとんどであり、なかに、口径約12cmとやや小振りのものもみられる。底部は、ヘラ削りのもの、ヘラ削り後にナデを施したものが多く、回転ヘラ削りのものもみられる。

土師器窯は、A類にヘラ磨きが施され、内面黑色処理のもの（1）が前段階に引き続いてみられる。当該期のものは、薄手で、口縁部内面に稜を持っている。体部外面にはヘラ削り後にナデか、口縁部には横ナデが施されている。

当該期から土師器高台付皿（2）が加わる。体部内・外面にはロクロナデが施され、底部は回転ヘラ削り後、高台を貼付けていく。

須恵器高台付盤は、前段階の一番大形のものがみられなくな、口径が約16cmのもの（14）と口径約14cmのもの（15）がみられ、新たに口径約10cmのもの（16）がみられるようになる。口縁部は外反するものが多い。底部の調整は、いずれも回転ヘラ削りである。

須恵器窯は、窯器状のつまみを持ち、口縁部が短く垂下する（7～13）。口径約16cmのものが確認され、須恵器高台付窯の口縁の合うものとセットになると思われる。また、新たに窯器状のつまみを持ち、口縁部が短く垂下するもの（26・27）がみられ、それは短頸甌（28）の口縁の合うものとセットになると思われる。計測値は、口径が約17cmのものと、口径が約13cmのものがある。

須恵器窯の器種で、当該期から新たに加わるものとして、盤（20・21）と高盤（17～19）がある。

須恵器窯は、口径約20cmのものと、口径約17cmのもので、大・小が確認される。底部は丸底気味で、体部と口縁部の縁はきりとした稜をもっている。底部の調整は回転ヘラ削りである。

須恵器窯は、窯が大きく開き、透かしを持つもの（17・19）と、持たないもの（18）がある。体部の窯が、約22cmと大形のもの（17）のほかに、脚部からみせて、中形と小形のものもあるようである。

煮沸具・貯蔵具は、須恵器の割合は多くなるものの、依然として土師器が多い。

土師器爨は、口縁部をつまみ上げ、体部下部に縄位のヘラ磨きが施された常縁型爨（22・23）が引き続いてみられる。

須恵器爨は、破片であり、全容は不明であるが、縄位状文具による波状文を施した口縁部片、斜位の平行押きを施したもの（30）がみられる。

須恵器甌は、体部外面にロクロナデが、下端にヘラ削りが施され、把手の付く2孔式のもの（29）が新たにみられる。
その他に、須恵器小形短頸壺（31）、同円面硯（32～35）が出土している。

第1図 宮後遺跡1期の土器群
N期（9世紀前葉）

須恵器壺は、当期以降C類のみになる。前段階と同様に、深身で、口径が13〜14cmであるが、前段階のものよりも口径と底径との差が若干大きくなる（4〜7）。底部の調整は、回転へら削りのものが多く、ほかに、へら削り後ナデのものと一方向の手持ちへら削りのものがみられる。

土師器壺は、当期において確認できず。食器具では、土師器高台付壺が少量みられるだけになる。土師器高台付壺は、体部下端に稜を持つもの（1・2）であり、須恵器高台付壺を模倣したものと思われる。調整は、へら磨きで内面に黒色処理が施されている。

須恵器高台付壺は、体部下端の稜が前段階のものよりも弱くなるもの（13〜15）がみられる。計測値は、口径14cmのもの（13）と、口径11cmのもの（14）が確認される。

須恵器壺は、口縁の屈曲が弱くなるもの（16〜18）がみられる。

第131図 宮後遺跡N期の土器群

須恵器盖は、前段階と同様に、擬宝珠状のつまみを持ち、口縁端部が短く垂下するもの（8〜10・12）がほとんどであるが、ほかに、天井部が扁平で、口縁部が平らになり端部を丸く収めているもの（11）も1点確認
されている。口径14～15cmのもと、口径17～18cmのものがある。

煮沸具・貯蔵具は、前段階よりさらに須恵器の割合が増える。土師器の縁はみられなくな、破片であり全容は不明であるが、須恵器の縁（23）のみとなる。

土師器壷は、大形のもので体部下半にへら削きを施したもの（21・22）に加え、横位のへら削りを施したもの（20）がみられ、調整がへら削りのものは大（20）と小（19）に分けられる。長胴であり、口締部は明瞭にまとめられている（22）。

須恵器壷は、破片であり全容は不明であるが、口締部は、前段階と同様に、波状文を施したものに加え、無文のものが確認される。

その他、須恵器高盤、同長頸瓶の破片が出土している。

V期（9世紀中葉）

食器具は、前段階から一転して、土師器の占める割合が増え、器種も豊富になる。

須恵器壷は、前段階のものより口径と底径の差がさらに大きくなり、体部は直線的に大きく開くもの（13～15）がみられる。計測値は、口径が13～14cmである。調整は体部下端に回転へら削りのものが極量みられる。

底部は、①回転へら切りのもの、②回転へら切り後、へらナデ及びナデのもの、③回転へら切り後、手持ちへ

ら削り及びへら削りのものがみられ、①と②のものが多い。

土師器壷は、ロクロ成形のD類がみられるようになる。口径と底径の差が大きいもの（3・4）と小さいも

の（1・2）がみられ、それぞれ浅身のものと深身のものがある。なかに口締部が外反するものがみられる。

計測値は、口径が約15cmでやや大形のものと、口径13～14cmのものがあり、後者が大部分を占める。

土師器鉢は、大形の壷ともいえるような浅身のもの（5）と、深身のもの（6）が極量みられる。

土師器壷は、高台が低いもの（9・10）と、高いもの（7・8）があり、なかに口締部が外反するものがあ

る。計測値は、前者が口径約13cm前後、後者が口径約16cmである。

土師器高台付皿は、体部が直線的に立ち上がり口締部に至るもの（11）と、内彫気味に立ち上がり口締部が

外反するもの（12）がみられる。口径が約15cmの大形のものと、口径が12～13cmの小形のものがみられる。

上記の土師器の調整は、へら削きでいずれも面内黑色処理が施され、体部下端及び底部は回転へら削りであ

る。

須恵器高台付皿は、当期から新たに加わる（21・22）。計測値は、口径14～15cmである。

須恵器盤（20）及び高台付壷（16～19）は、わずかにみられる程度になる。

煮沸具・貯蔵具は、依然として須恵器の占める割合が多い。

当期から、土師器の鉢形の瓶が新たに加わる（26）。調整は、外面が縦位のへら削り、内面がへら磨きで、

内面に黑色処理が施されている。

土師器の瓶は、大形のもの全容は不明であるが、小形のもの（23・24）は体部が前段階よりもやや長胴化

し、また、体部の最大径が口径とはほぼ同じになる。体部下端には横位のへら削りが施されている。

須恵器瓶は、口締部が下方に突出し、肩の張りが弱くなる（30）。

須恵器瓶は、直線的に外傾し、内・外面にロクロナデが施されたもの（28）がみられる。また、外面に格子

目押しが施されたもの（27）もみられる。

その他に、須恵器長頸瓶（32～35）、同横瓶（31）、同円面観（39）、灰釉陶器瓶（36・37）、同長頸瓶（38）

が出土している。
第 201 図 宮後遺跡 Ⅲ期の土器群（1）
第6図　宮後遺跡Ⅰ期の土器群（2）

Ⅰ期（9世紀後葉）
食器類は、ほとんどが土師器で占められるようになり、須恵器は僅かしか見られない程度になる。

須恵器群は、前段階より盛器がわずかに拡大し、体部が内壁に立ち上がるもの（17・18）のみになる。

土師器群は、D類のものであり、前段階のものと同様に、口径と底径の差が大きいものと小さいもの、浅身のものと深身のものが混在する。なかに日輪部が外反するものもある。計測値は、小口径13～14cmのものがほとんどであり、新たに口径約18cmの大形のもの（7）もみられる。

土師器高台付皿は、前段階のものと同じに大きな変化はみられないが、なかに高台の高いもの（10）もみられるようになる。

土師器椀は、高台の低めのものがみられなくなる。また、体部が直線的に開く足高台椀が1点認められる（13）。

土師器鉢は、前段階と比べ大きな変化はみられないが、より大形のもの（15・16）が加わる。上記の土師器の盛器は、壊に底部へら磨きのものが1点、鉢に体部下端に手持ちへら削りのものが1点みられるほかは、いずれもへら磨きで内面黑色処理が施され、体部下端及び底部には回転へら削りが施されている。

煮沸具・貯蔵具も、土師器の占める割合が多くなる。

土師器壺は、口縁部をつまみ上げたもののもかに、口縁端部を丸く取めたもの（22）もみられるようになる。前者は窯片であり、その全容は不明であるが、後者は縄文部のへら削りが施されている。

土師器瓶も、口縁部を丸く取ったもの（19）が認められる。調整は、内面がへら磨き、外面が縄文のへら削りで、内面に黑色処理が施されている。

土師器瓶は、筒状のもの（20）が認められる。また、当該期から、新たに土師器船釜が加わる（23）。

須恵器瓶は、ロクロナデが施されたもの（24）のみになる。

その他に、灰釉陶器瓶（26～28）、同段皿（31）、同蓋（30）、同短頸壺（25）、同長頸瓶（29）が出土している。

以上のように、当遺跡の奈良・平安時代の土器は、6期にわたる変遷が認められる。各期の年代位置づけは、須恵器の多くが木葉下窯の製品であることから、木葉下窯須恵器の編年による年代観などを参考に、次のように考えておく。Ⅰ期は8世紀前期、Ⅱ期は8世紀中葉、Ⅲ期は8世紀後葉、Ⅳ期は9世紀前期、Ⅴ期は9世紀中葉、Ⅵ期は9世紀後葉である。
(2) 奈良・平安時代の集落変遷
ここでは、6期にわたる土器の変遷をもとに、住居跡及び主な出土遺物について各期の様相を述べる。
第Ⅲ図 宮後遺跡Ⅱ期の遺構群
第 228 図 宮後遺跡Ⅰ期の遺構群

— 675 —
第 図 宮後遺跡Ⅱ期の遺構群
第図 宮後遺跡Ⅰ期の遺構群
第図10
宮後遺跡II期の遺構群

- 678 -
第 図 宮後遺跡 期の遺構群
I期（8世紀前葉）
この時期の住居跡は14軒で、調査1区に3軒、2区に4軒、3区に1軒、5区に6軒と遺跡の南部及び西部に集中している。この期は小支谷を挟んで立地する山頂遺跡や大塚遺跡との関連が強いと思われる。遺物は、61・96・115・116・133・134号住居跡から刀子・鎌・鍬先・鉄具等の金属製品が出土している。中でも落人が使用する屋敷用具（鉄具）が2軒の住居跡から1個ずつ出土していることが特筆され、第133号住居跡からは円面鏡と墨書土器（万益）物と金属製品（刀子・鎌・鉄具）が一緒に出土しており、宮内遺跡の中心的な家であったことや、土器に書かれた墨書からは、開墾や農作業を行うにあたって農作を祈ったものが残っている。また、立て替えがあったと考えられる第34・35号住居跡からは、静岡県の湖西産の須恵器の裏の口縁部片が出土していることも特筆される。さらに、第44号掘立柱建物が確認できたことから、この時期に5区には、掘立柱住居以外に掘立柱建物が造られ始めたと考えられる。

II期（8世紀中葉）
この時期の住居跡は10軒で、住居数の変化はあまり見られない。調査2区に5軒、3区に4軒、5区に1軒と遺跡の西部に集中しており、隣接する大塚遺跡との関連が考えられる。遺物は、第56・65・75号住居跡から金属製品（鍬・刀子）、紡錘車が出土している。

III期（8世紀後葉）
この時期の住居跡は13軒で、調査1区に2軒、2区に5軒、3区に3軒、4区に1軒、5区に2軒と、どちらかといえば西部に集中しているが、遺跡全体に広がりをみせる。遺物は、第62・69・87・117号住居跡から刀子・鉄釜・鍬先の金属製品が、また、円面鏡及び紡錘車が出土している。第87号住居跡からは、円面鏡及び刀子と併せて「益」「万」等と墨書された土器が出土していることも注目される。文字は楷書体で書かれている。

IV期（9世紀前葉）
この時期の住居跡は21軒で、前期より倍近くに増え、人口の増加が見られる。調査1区に1軒、2区に9軒、3区に3軒、4区に4軒、5区に4軒と遺跡の北部から中央部及び南部にまとまっている。今まで住居がなかった4区の小支谷の先端にも住居が構築されるようになる。遺物は、第66・84・86号住居跡から刀子・鎌等の金属製品が、第105号住居跡から絵釉陶器が出土している。絵釉陶器は、胎土が精選され、畿内周辺で作られたと考えられるものである。物質の集散地と考えられている奥谷遺跡に近いとは言え、貴重な物を入手できる基盤があったことが窺える。

V期（9世紀中葉）
この時期の住居跡は33軒と前期よりさらに増えて当遺跡での最大規模となる。掘立柱建物も住居同様に、この時期多く建てられたようである。調査1区に4軒、2区に8軒、3区に5軒、4区に6軒、5区に10軒で、やはり遺跡の南部にまとまっている。遺構数の増加は、人口の増加が考えられる。遺物は、第55・57・88・93・94・95号住居跡から刀子・鎌・馬具等の金属製品が、58・73・85・93・94・97・98・100号住居跡から円面鏡や釉釉陶器がそれぞれ出土している。また、4区の住居跡の1軒をのぞき金属製品や釉釉陶器が出土しており、この時期の中核的な家が集まっていたと思われる。中でも第93号住居跡は、馬具の一部が出土していることから馬を飼っていたこと、釉釉陶器の出土から財力の基盤があったとも窺える。第88号住居跡からは、刀子が6本も出土し、また「南主」と書かれた墨書が出土していることが注目される。墨書土器は、33軒の住居跡中16軒から出土している。
VⅥ期（9世紀後葉）

この時期の住居跡は10軒と前時期の約3分の1に減る。発見7区に3軒、8区に3軒、9区に4軒で、やはり遺跡の南部にまとまっていく。住居の数は減少ものの、5区では大型の第127号住居跡を中心に、 Tanzaku柱建物がまわりに巡るように建てられていたことが考えられる。また、その後の第127号住居跡の出土遺物からも、経済的に豊かな人々の存在が想像される。遺物は、第80・122・127号住居跡から刀子・鎚・鏡・火打金・鍵等の金属製品が、第122・124・127号住居跡から円面鏡や灰釉陶器や腰帯具がそれぞれ出土している。第124号住居跡から出土した灰釉陶器は大形の短頸壺で、黒縁90号窯式段階のものと思われる。なお、 Tanzaku柱建物跡は短期間に建て替えが行われていたようである。5区の西部の第127号住居跡からは、大量的焼土等が検出され、その中から竹のようなもののが炭化物や鉄などが出土している。焼土は、近くの Tanzaku柱建物跡の柱穴からも出土しており、覆土の堆積状況から住居や Tanzaku柱建物などが焼けた後、埋められたと思われる。焼土は住居等の壁材と思われ、近くの粘土採掘坑の粘土等を使用しているかどうか分析してみたが、成分が違うという結果がでた。

当期以後の住居跡は確認できず、この時期をもって集落としての終焉を迎えると思われる。

このほかに出土遺物から判断して平安時代と考えられる住居跡が13軒ある。

当遺跡の奈良・平安時代を特徴づけるものとして墨書土器がある。表18から、8世紀中葉から出現し、9世紀中頃にピークを迎え、9世紀の終わりに終焉したことが分かる。墨書土器の出土点数は110点あり、その内容推定した文字を含めて判読できるものは108点ある。器種では土師器が全体の約70％を占め、須恵器は8世紀代に多い傾向があることが分かる。主な文字を挙げてみると、①名字（他田・日吉部：第594図5・6）、②吉祥的な文字（利・益・万益・益：第594図10・11・12）、③方位を表すような文字（北・南・南東：第594図7・8・9）、④家がつく文字（子家・畑家・多子家・家）、⑤地域ないし集団を表すと思われる文字（大在、

![Image](image-url).}

第565図 宮後遺跡出土墨書土器（1）
1：遺構外  2：第XXX号住  3・4：第XXX号住  5：第XXX号住  6：第XXX号住
在：第594図1～4），（⑥その他（中上・村・生）等である。まず①の「日奉部」は、鹿の子C遺跡の漆絵文書にみられ、墨書土器としては県内で初めての出土である。墨書された須恵器壺の時期が、住居の時期と合わないことから、それらは投棄されたものと思われるが、石原遺跡では8世紀前半の第16号居住遺から出土している。宮後遺跡の近くにも「他田日奉部」を名乗る一族がいたことが想像できる。次に、8世紀中葉から出現し、9世紀後葉に多く出土する「在」という文字は、墨書全体の約40％を、5区で出土した文字の約64％を占めることから当集落の中心的な文字と言える。また、「在」という文字（第594図2・3・4）に筆跡の違いが見られ、文字の書ける人か、複数いたことが窺える。

当遺跡から小橿川沿いに遡った台地の大山原地区からは「前家□□」と墨書された須恵器壺が出土していること、当遺跡と隣接した大塚遺跡、銅山遺跡、石原遺跡の立地等から小橿川を挟んだ両岸の台地上には、平安時代の大きな集落が存在したことが考えられる。

最後に紡錘車（石製や土製）の出土数は、4点と少ない。金属製のものは、出土していない。つまり、織物は宮後集落の特産物ではなかったと考えられ、鍛・鉄先などの農具の出土からこの集落は農業を基盤としていたと考えられる。
<table>
<thead>
<tr>
<th>時期</th>
<th>調査区</th>
<th>1〜4区</th>
<th>5区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>文字</td>
<td>器種・器形・部位・器面方向</td>
<td>適</td>
</tr>
<tr>
<td>Ⅰ期</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Ⅱ期</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Ⅲ期</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Ⅳ期</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Ⅴ期</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

表 ≪宮後遺跡墨書土器一覧≫
<table>
<thead>
<tr>
<th>時期</th>
<th>調査区</th>
<th>1 ～ 4 区</th>
<th>5 区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>文字</td>
<td>器種・器形・部位・埋葬方向</td>
<td>遺構</td>
<td>文字</td>
</tr>
<tr>
<td>遣構</td>
<td>土壇体</td>
<td>土壇体</td>
<td>遣構外</td>
</tr>
<tr>
<td>遣構</td>
<td>土壇底</td>
<td>土壇底</td>
<td>遣構外</td>
</tr>
<tr>
<td>遣構</td>
<td>土壇底</td>
<td>土壇底</td>
<td>遣構外</td>
</tr>
<tr>
<td>遣構</td>
<td>土壇底</td>
<td>土壇底</td>
<td>遣構外</td>
</tr>
<tr>
<td>遣構</td>
<td>土壇底</td>
<td>土壇底</td>
<td>遣構外</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表 ① 宮後遺跡の主な金属製品・灰釉陶器・円面鏡等一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>時期</th>
<th>調査区</th>
<th>1 ～ 4 区</th>
<th>5 区</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>月</td>
<td>遣物</td>
<td>住居跡</td>
<td>遣物</td>
</tr>
<tr>
<td>頃</td>
<td>円面鏡</td>
<td>月</td>
<td>円面鏡</td>
</tr>
<tr>
<td>頃</td>
<td>円面鏡</td>
<td>月</td>
<td>円面鏡</td>
</tr>
<tr>
<td>頃</td>
<td>円面鏡</td>
<td>月</td>
<td>円面鏡</td>
</tr>
<tr>
<td>頃</td>
<td>円面鏡</td>
<td>月</td>
<td>円面鏡</td>
</tr>
</tbody>
</table>

丸数字は出土点数
3 中・近世

中世の遺構として塚1条、地下式壇18基、堅穴状遺構11基、粘土貼土塚1基、土塚塚1基、井戸跡7基、道路状遺構1条が検出された。平安時代（9世紀後葉）に集落としての機能がなくなってから、しばらく間をおいて14世紀代に余の字彫の塚が掘られた。当時は、大戸氏がこの一帯を治めていたと思われるが、居城の所在地は不明である。当遺跡付近に城館が存在した記述がないため、塚等の遺構の性格は不明である。第1号堅穴状遺構は、長軸5.59m、短軸2.88mの長方形で、柱穴が2か所あり、東壁側にスロープを持っている。その形態から倉庫と思われ、塚の内部中央部付近に存在することから塚に伴うものと思われる。塚は15世紀代に廃絶され、踏み固めの状況から、埋没する過程で通路として利用されたと考えられる。

15世紀後半から地下式壇（第1号）が造られ始めた。第3号地下式壇は、15世紀後半から16世紀前半に位置づけられることや塚の内外に存在することから、1世紀ほどの間に地下式壇は造られたと思われる。また、地下式壇や遺構外から茶臼が、それぞれ出土している。当時、お茶は武士や上流階級しか嗜まなかったようであることから、有力人が用いたと考えられる。また、第4号井戸跡は断面形がラッパ状で、鍼状の掘り込みを持っている。ここから常滑産と瀬戸産の15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる陶器が出土している。同じ鍼状の掘り込みを持つ第5号井戸跡からは、馬の骨が出土している。これらの状況から廃業時に祭祀的なことが行われたことが考えられる。
その後、当遺跡のある近藤地区は、16世紀後半に佐竹氏の所領に、さらに江戸時代には旗本領となり、「今藤」という名が文書に登場した。

以上のことから、当遺跡は、繊文時代から中世半まで人々の生活の舞台となった複合遺跡であることが明らかになった。

註
1）川又清明『湖沼前川流域における弥生時代後期の遺跡の分布状況』研究ノート 第9号 茨城県教育財団 2000年6月
2）海老澤健『東日本弥生時代後期の土器編年』第2分冊 茨城県 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 2000年1月
3）茨城県教育財団『やさしさのまち「桜の郷」埋蔵調査報告書』茨城県考古学会 2000年3月
4）山本静男『外山遺跡5号住居跡についての一考察』茨城県教育財団 1984年3月

参考文献
・飯島一美『前川東岸駅（友部・水戸）遺跡工事内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団 1998年3月
・長谷川光男『前川東岸駅（友部・水戸）遺跡工事内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団 1998年3月
・中村俊治・江藤良夫『茨城中央工業団地造成工事内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団 1998年3月
・茨城県考古学協会『茨城県における弥生時代研究の到達点～弥生時代後期の集落構成から～』1999年11月
・黒沢慎司『茨城県における古式土器の問題』前川中央考古 3号 前川考古団 1981年3月
・海老澤健『前川中央と伴出する土器群の考察』前川中央考古 9号 前川考古団 1987年5月
・佐藤幸男『茨城県における弥生時代終末期の様相～とくに前川中央と五階式土器の共存関係について』前川中央考古下巻 吉川弘文館 1988年10月
付 章

宮後遺跡第110・115号住居跡出土土器及び
第4号粘土採掘坑採取粘土の元素組成及び鉱物組成等について

茨城県工業技術センター営業指導所

1. 目的
茨城県宮後遺跡から出土した土器片と第4号粘土採掘坑から採取した粘土2種の元素組成及び鉱物組成分析を行い、これらから当該粘土が土器片の原料か否かの推定を行った。

2. 調査対象試料
茨城県大字近藤222-3 茨城県宮後遺跡：第110・115号住居跡及び第4号粘土採掘坑

試料① 土器片：IS-1 / SI-115 / 1 区
試料② 土器片：IS-1 / SI-115 / 3 区 上層
試料③ 土器片：IS-1 / SI-115 / 1 区 中層
試料④ 土器片：IS-1 / SI-110 / 3 区 上層
試料⑤ 白粘土：IS-1 / 第4号粘土採掘坑
試料⑥ 粘土：IS-1 / 第4号粘土採掘坑

3. 測定項目及び測定方法
（1）元素組成
試料を100℃で乾燥させた後、タングステンカーバイド製振動ミルにより粉砕し、蛍光X線分析に供した。
蛍光X線分析はガラスピート法（四ほう酸リチウム：試料=10：1 番観）により前処理後、蛍光X線分析装置を用い、周期律表でNa以上の元素の測定を行った。
（2）鉱物組成
試料を風乾させた後、タングステンカーバイド製振動ミルにより粉砕し、分析に供した。鉱物組成は、
X線回折（粉末法）により測定した。

4. 測定結果
（1）元素組成分析結果
元素組成分析結果を表1に示す。各試料の主構成元素は表1に示した10成分であり、他の元素はほとんど検出されなかった。
表 1 元素組成分析結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>試料名</th>
<th>0.10</th>
<th>0.00</th>
<th>0.00</th>
<th>0.00</th>
<th>0.00</th>
<th>0.00</th>
<th>0.00</th>
<th>0.00</th>
<th>0.00</th>
<th>0.00</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>試料1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>土壌</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(2) 鉱物組成分析結果

鉱物組成分析結果を図 1-1 ～図 1-6 及び表 2 に示す。

![図 1-1 X線回折試験結果 試料 1 土器片：Ⅲ ⅢⅢⅢ ⅢⅢⅢⅢ区](image1)

![図 1-2 X線回折試験結果 試料 1 土器片：ⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢⅢ区 上層](image2)
図1-3  X線回析試験結果 試料：土器片 目：Ⅱ-Ⅲ-Ⅳ-1 区 中層

図1-4  X線回析試験結果 試料：土器片 目：Ⅱ-Ⅲ-Ⅳ-3 区 上層

図1-5  X線回析試験結果 試料：粘土 目：Ⅱ-Ⅲ第4号粘土採掘坑

凡例
\[\begin{array}{ll}
\text{図} & \text{石英 (Ⅱ-Ⅲ) }  \\
\text{図} & \text{アラスナイト (長石類) }  \\
\text{図} & \text{マスパイト (雲母類) }  \\
\text{図} & \text{ガイト (粘土類) }  \\
\text{図} & \text{モザリサイト (粘土類) }  \\
\text{図} & \text{アロニチ (粘土類) }  \\
\text{図} & \text{レマサイト (酸化鉄) }  \\
\end{array}\]
各土器片の鉱物組成は図1-1、1-4及び表2から、試料③、⑤は石英/長石/雲母系のほぼ同様の組成であり、試料①及び④は石英/長石/粘土系の組成であった。しかし、第4号粘土採掘坑の粘土2種とは大きく組成が異なり、特に石英の含有割合が大きく異なっている。

表2 宮後遺跡出土土器片の鉱物組成 同定した鉱物及び簡易定量値 □

<table>
<thead>
<tr>
<th>鉱物種</th>
<th>石英</th>
<th>長石類</th>
<th>クラゲオバ系</th>
<th>粘土類</th>
<th>その他の合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1%</td>
<td>3%</td>
<td>1区上層1区中層</td>
<td>3区上層白粘土</td>
<td>3区上層粘土</td>
</tr>
</tbody>
</table>

5. 考察：元素組成および鉱物組成分析結果に基づく出土品に関する考察

元素組成分析結果をIg.loseを除いた珪酸分（SiO2）、アルミニ分（Al2O3）アルカリ土類成分（CaO + MgO）、アルカリ成分（Na2O + K2O）および鉱分（Fe2O3）のグループにまとめ、土器片4種を図2に示す。

図2 元素組成比較：宮後遺跡出土土器片

図2から試料① 3 IS = 1 / SI = 115 / 3区上層及び試料③： 5 IS = 1 / SI = 115 / 1区中層はほぼ同じ元素組成
であった。また、試料①：51S−1 / SI−115 / 1はFe2O3（鉄分）がやや多く含まれるほかは前者とほぼ同じ組成であった。

次に、第4号粘土採掘坑採取粘土2種と各土器片の元素組成比較を図3−1～3−4に示す。

図3−1 元素組成比較：midd. midd. midd1 区と粘土
図3−2 元素組成比較：midd. midd. midd3 区と上層と粘土
図3−3 元素組成比較：midd. midl. midd1 区と中層と粘土
図3−4 元素組成比較：midd. midl. midd3 区と上層と粘土

図3−1から試料①の元素組成は第4号粘土採掘坑採取粘土2種と異なり、2種の粘土の混合も考えられないと、試料②、試料③及び試料①も図3−2、図3−3及び図3−4から、同様に異なる材質であると考えられる。

鉱物組成についても試料②、③が石英／長石／雲母系、試料①・④が石英／長石／粘土系と土器片の鉱物組成には差異があるが、両者の石英の含有割合が第4号粘土採掘坑の粘土2種と比較し高い割合であることが判明した。

以上のことから各土器片は、粘土採掘坑から掘り出された粘土だけで製作されたのではないか推察できる。

6. まとめ

・蛍光X線分析による各試料の主構成元素は通常土壌等に含有される10成分であり、他の元素はほとんど検出されなかった。

・X線回折の結果から試料②③が石英／長石／雲母系、試料①④が石英／長石／粘土系の鉱物組成であり、第4号粘土採掘坑採取粘土よりも高い石英の含有量であった。

・各土器片の原料は、第4号粘土採掘坑の粘土が原料と仮定しても、これらの材料だけで作られたものとは考えられない。
宮後遺跡第127号住居跡覆土及び
第4号粘土採掘坑採取粘土の元素組成及び鉱物組成等について

茨城県工業技術センター実業指導所

1. 目的
茨城県宮後遺跡から出土した壁材と思われる焼土と焼土を埋めていたと考えられる土（埋め土）が同じまたは異なるものの差異を示すために、元素組成及び鉱物組成分析を行った。また、壁材としたと思われる当遺跡の第4号粘土採掘坑から採取した粘土2種について同様の測定を行い、材料的な知見から当該粘土が第127号住居跡の壁材か否かの判定を行った。

2. 調査対象試料
茨城町大字近藤222−3　茨城県宮後遺跡：第127号住居跡及び第4号粘土採掘坑

試料①　焼土：IS-1 / SI-127
試料②　埋め土：IS-1 / SI-127
試料③　白粘土：IS-1 / 第4号粘土採掘坑
試料④　粘土：IS-1 / 第4号粘土採掘坑

3. 測定項目及び測定方法
（1）元素組成
試料①、②、③、④について行った。
試料を100℃で乾燥させた後、タングスタンカーバイド製振動ミルにより粉碎し、蛍光X線分析に供した。
蛍光X線分析はガラスビート法（四重酸リチウム：試料＝10：1番付）により前処理後、蛍光X線分析装置でNa以上の元素の測定を行った。

（2）鉱物組成
元素組成と同様に試料①、②、③、④について行った。
試料を風乾させた後、タングスタンカーバイド製振動ミルにより粉碎し、分析に供した。鉱物組成は、
X線回折（粉末法）により測定した。

4. 測定結果
（1）元素組成分析結果
元素組成分析結果を表1に示す。各資料の主構成要素は表1に示した12成分であり、他の元素はほとんど検出されなかった。
表1 元素組成分析結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>試料名</th>
<th>Si</th>
<th>Al</th>
<th>Fe</th>
<th>Mn</th>
<th>Mg</th>
<th>Ca</th>
<th>Na</th>
<th>K</th>
<th>P</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>焼土</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>埋め土</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第4号粘土採掘坑白粘土</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第4号粘土採掘坑粘土</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（2）鉱物組成分析結果
鉱物組成分析結果を図1-1〜図1-4及び表2に示す。

図1-1 X線回析測定結果：試料□ 焼土
図1-2 X線回析測定結果：試料□ 埋め土
図1-3 X線回析測定結果：試料□ 白粘土
図1-4 X線回析測定結果：試料□ 粘土
凡例 □: 石英（SiO2） □: フノサイト（長石類） □: らんサイト（雲母類） □: ヘマタイト（粘土類）
□: シモンサイト（粘土類） □: アルファン（粘土類） □: ベミタイト（酸化鉄）
表2 鉱物組成分析結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>鉱物名</th>
<th>燃焼</th>
<th>燃焼土</th>
<th>埋め土</th>
<th>燃焼坑白粘土</th>
<th>燃焼坑粘土</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>石英</td>
<td>80%</td>
<td>80%</td>
<td>80%</td>
<td>80%</td>
<td>80%</td>
</tr>
<tr>
<td>長石</td>
<td>20%</td>
<td>20%</td>
<td>20%</td>
<td>20%</td>
<td>20%</td>
</tr>
<tr>
<td>雲母</td>
<td>10%</td>
<td>10%</td>
<td>10%</td>
<td>10%</td>
<td>10%</td>
</tr>
<tr>
<td>粘土</td>
<td>5%</td>
<td>5%</td>
<td>5%</td>
<td>5%</td>
<td>5%</td>
</tr>
<tr>
<td>其他</td>
<td>0%</td>
<td>0%</td>
<td>0%</td>
<td>0%</td>
<td>0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

各試料から石英、アノーサイト（長石）を同定した。試料①、②、④からマスクバイト（白雲母）、試料③、④からハロサイト、試料①、②からモンモリロナイトを試料①、②、③からヘマタイト（酸化第二鉄）を同定した。試料①燃焼からGrossular, hydroxylian（CaAl₂(OH₄), Co₃, OH）を、試料③からアロフェンを同定した。これらの鉱物は他試料からは同定できなかった。なお、試料①、②から同定したモンモリノイトの存在を確認するにはさらに確認作業が必要である。

5. 考察：元素組成及び鉱物組成分析結果に基づく出土品に関する考察

元素組成分析結果をIg.lossを除いた珪酸分（SiO₂），アルミニナ（Al₂O₃）アルカリ土類成分（CaO + MgO），アルカリ成分（Na₂O + K₂O）および鉄分（Fe₂O₃）のグループにまとめ，燃焼と埋め土を図2に、燃焼と4号粘土採掘土を図3に示す。

![図2 燃焼及び埋め土の元素組成](image1)

![図3 燃焼及び粘土採掘後の元素組成](image2)
図2から、試料①及び試料②の元素組成は、アルミナ分及び鉄分に差異が認められ、異なる材質であると考えられる。
図3から、試料①に対し試料③及び試料④は、鉄分、アルミナ分及びアルカリ土類成分に差異が認められ、異なる材質と思われる。
また、鉱物組成についてはX線回折の結果（図1-1-1-4及び表2）から、元素組成分析の結果と同様に、試料①、②、③及び④は異なる材質であると考えられる。
これらのことから、焼土は埋め土とは別のものであると考えられる。また、焼土の材料は、第4号粘土採掘坑で採取された材料だけで作られたものと考えられず、今回調査対象外の材料が用いられているか、調査対象の材料に加えて他の場所から採取した材料を使用しているとも考えられる。

6. まとめ
・蛍光X線分析による各試料の主構成元素は通常土壌等に含有される10成分であり、他の元素はほとんど検出されなかった。
・X線回折の結果から、各試料とも、通常土壌等に含有される石英、長石、雲母、ハロイサイト、モンモリロナイトなどを同定した。
・試料①焼土からは、他の試料にはないGrossular, hydroxylian (CaAl2 (SiO4, CO3, OH))を同定した。
・元素組成及び鉱物組成から、試料①焼土と試料②埋め土は、異なる材質であると考えられる。同様に試料①焼土と試料③第4号粘土採掘坑白粘土及び試料④第4号粘土採掘坑粘土は、異なる材質と思われる。
・焼土の材料は、第4号粘土採掘坑で採取された材料だけで作られたものとは考えられず、今回調査対象外の材料が用いられているか、または調査対象の材料に加えて他の場所から採取した材料を使用しているとも考えられる。
写真図版
第199号住居跡
遺物出土状況

第200号住居跡
完掘状況

第201号住居跡
遺物出土状況
第๑๐号住居跡
完掘状況

第๑๐号住居跡
遺物出土状況

第๑๐号住居跡
遺物出土状況
第 0 号住居跡
遺物出土状況

第 0 号住居跡
遺物出土状況

第 0 号住居跡
完掘状況
第10号住居跡
遺物出土状況

第10号住居跡
竃遺物出土状況

第9号住居跡
遺物出土状況
第000号住居跡
遺物出土状況

第000号住居跡
遺物出土状況

第000号住居跡
遺物出土状況
第 124-1号住居跡
遺物出土状況

第 124-2号住居跡
完掘状況

第 124-3号住居跡
遺物出土状況
第々々号住居跡
完 播 状 況

第々々号住居跡
遺 物 出 土 状 況

第々々号住居跡
遺 物 出 土 状 況
第□□□号住居跡
完掘状況

第□□□号住居跡
炉完掘状況

第□□□号住居跡
完掘状況
第 ⸀号住居跡
遺物出土状況

第 ⸀号住居跡
完掘状況

第 ⸀号住居跡
遺物出土状況
第000号住居跡
遺物出土状況

第000号住居跡
完掘状況

第000号住居跡
遺物出土状況
第000号住居跡
竪遺物出土状況

第000号住居跡
遺物出土状況

第000号住居跡
完掘状況
第①号住居跡
完掘状況

第③号住居跡
遺物出土状況

第④号住居跡
遺物出土状況
第4号掘立柱建物跡
確認状況

第6号掘立柱建物跡
完掘状況

第〇〇号掘立柱建物跡
完掘状況
第7号掘立柱建物跡
完 撿 状 況

第8号掘立柱建物跡
完 撿 状 況

第9号掘立柱建物跡
完 撿 状 況
第 000号掘立柱建物跡
完 掘 状 況

第 000号掘立柱建物跡
完 掘 状 況

第 000号掘立柱建物跡
完 掘 状 況
第 周 合 掘 立 束 建 物 跡
完 掘 状 況

第 周 合 掘 立 束 建 物 跡
完 掘 状 況

第 周 合 掘 立 束 建 物 跡
遺 物 出 土 状 況
目次

第〇〇号掘立柱建物跡
完掘状況

第〇号溝
完掘状況

第〇〇号土坑
遺物出土状況
第1号ビット群
完掘状況

第1号地下式塚
完掘状況

第2号地下式塚
完掘状況
第4号地下式壇
完掘状況

第9号地下式壇
完掘状況

第□号地下式壇
完掘状況
目次

第…・…・…・…号住居跡出土遺物
第1号住居跡出土遺物
第〇〇・〇〇～〇〇・〇〇～〇〇号住居跡出土遺物
第03-00-00号住居跡出土遺物
第 200・207・210・211 号住居跡出土遺物
第

戻る
第10・11・12・13・14・15・16・17・18号住居跡出土遺物
第 3 号・ 6 号住居跡，第 3 号・ 7 号掘立柱建物跡，第 3 号・ 8 号・ 9 号土坑，第 3 号竪穴状遺構出土遺物
第9号土坑、第1号竪坑群、第2号遺物群陵層、第5号地下式壪、第1号壪、第9・10号溝、遺構外出土遺物
出土土製品（土玉・紡錘車・管状土錘・支脚）
出土金属製品（鉄斧）, 出土石器・石製品（砥石・石皿・石臼・環状石斧）
出土金属製品（銅・銃・銚・鉄先・錘打金・馬銜・鍵・鎚・不明）
出土金属製品（刀子・小刀・釘・鉤具・古銭・不明）